

令和6年度（2024年度）自治体職員協力交流事業
協力交流研修員 研修報告書

2024 Local Government Officials Training Program in Japan
Trainee Reports



一般財団法人 自治体国際化協会
Council of Local Authorities for International Relations

は じ め に

一般財団法人自治体国際化協会では総務省と連携し、海外の地方自治体の職員を日本の地方自治体で受け入れ、受入自治体を持つ様々なノウハウや技術等を習得させる「自治体職員協力交流事業」を実施しています。

平成8年度（1996年度）に創設され、これまでに38の国・地域から1,213名の研修員が本事業に参加されています。令和2～3年度（2020～2021年度）においては新型コロナウイルスによる渡航制約等を理由として開催を断念せざるを得ない状況でしたが、令和4年度（2022年度）は来日後の日本語研修を集合研修ではなくオンライン化するなど、調整・工夫を経た上で事業を再開しました。令和5年度（2023年度）は、コロナ禍以前と同様の形態で事業を実施し、そして令和6年度（2024年度）は、9か国から11名の研修生が様々な分野で実り多い研修を行いました。

本事業に参加された研修生の皆様は、現在では派遣元の海外自治体に復職し、日本における研修の成果や経験をそれぞれの職場において大いに活かされ、また、自治体間の国際協力・交流の貴重な架け橋として活躍されています。

本報告書では、研修員の日本での本研修における奮闘ぶりや研修の成果を各方面の方々のご協力のもと、全11事例を掲載する形で編集いたしました。

研修員派遣を検討される海外自治体や今後研修員の受け入れを検討されている日本の地方自治体において先行事例としてご参照いただければ大変幸甚でございます。

最後に、研修員の受け入れにご尽力されました各受入自治体及び関係機関の皆様方に、心よりお礼を申し上げます。

一般財団法人自治体国際化協会
交流支援部 経済交流課

令和6年度（2024年度）年度自治体職員協力交流事業スケジュール

令和6年度（2024）

【5月派遣】11名

岩手県（中国）・福井県敦賀市（韓国）・岐阜県高山市（中国・ペルー）・
滋賀県東近江市（中国）・鳥取県（中国）・岡山県笠岡市（マレーシア）・
高知県梶原町（ネパール×2）・大分県（中国）・大分県宇佐市（韓国）

5月26日（日） 協力交流研修員の来日

東京研修

5月27日（月） 開会式[場所：自治体国際化協会・東京本部]
オリエンテーション（自己紹介・アイスブレイク等）
受入自治体担当者との面談
日本事情クイズ
情報交換会

5月28日（火） 日本語レベルチェック（筆記・面接）
日本生活に関する質疑応答
都内視察（東京都庁・浅草）

5月29日（水） JIAMへ移動
JIAMオリエンテーション
JIAM館内施設案内等
歓迎交流会

日本語研修

5月30日（木） 日本語研修オリエンテーション
日本文化等講義

5月31日（金）～

6月26日（水） 日本語研修 授業開始（9:25～17:00）（土・日曜日は除く）

6月5日（水） 日本伝統文化講義（茶道）

6月15日（土）～

6月16日（日） 日野町スタディツアー

6月21日（金） 所外学習①（京都防災センター）

6月24日（月） 所外学習②（唐崎中学校訪問）

6月26日（水） 日本語研修終了、成果発表会

専門研修

6月27日（木） 閉講式
各受入自治体へ出発
受入自治体における専門研修開始

研修員の帰国

11 月以降

研修期間に応じて順次帰国

(敦賀市、東近江市、笠岡市、大分県、宇佐市の研修生は 11 月、
高山市の研修生 1 人は 12 月、高山市の研修生もう 1 人は 1 月、
鳥取県、梶原町の研修生 2 人は 3 月、岩手県の研修生は 5 月に
帰国)

令和6年度（2024年度）取組一覧（11人/9団体）

5月渡航

No.	受入自治体		派遣元の海外自治体	友好・姉妹協定	選考方法
1	岩手県		中国・大連市	地域間連携協定	独自
2	福井県	敦賀市	大韓民国・東海市	姉妹都市締結	独自
3	岐阜県	高山市	ペルー共和国・ウルバンバ郡	友好都市締結	独自
4	岐阜県	高山市	中国・麗江省	姉妹都市締結	独自
5	滋賀県	東近江市	中国・湖南省常德市	友好都市締結	独自
6	鳥取県		中国・吉林省	友好県省協定	独自
7	岡山県	笠岡市	マレーシア・コタバル市	姉妹都市提携	独自
8	高知県	梼原町	ネパール国・ニルカント市	なし	独自
9	高知県	梼原町	ネパール国・ニルカント市	なし	独自
10	大分県		中国・湖北省黄石市	なし (トップ交流実績あり)	独自
11	大分県	宇佐市	大韓民国・慶州市	姉妹都市締結	独自

※ 選考方法「独自」は受入自治体・派遣元の海外自治体間の合意に基づく申請を指す。自治体国際化協会による「斡旋」は該当なし。

令和6年度(2024)自治体職員協力交流事業(LGOTP)

報告書

目 次

(岩手県 ― 中華人民共和国大連市)

- ① 自治体報告書 「岩手県と大連市の架け橋として」
- ② 研修員報告書 「山川異境・風月同天 友情は長く続き」

(福井県敦賀市 ― 大韓民国東海市)

- ③ 自治体報告書 「研修公務員 チェ・ホジン氏の受入について」
- ④ 研修員報告書 「日韓行政システムの比較と学び」

(岐阜県高山市 ― ペルー共和国ウルバンバ郡・中華人民共和国麗江省)

- ⑤ 自治体報告書 「高山市の自治体職員協力交流事業の活用について」
- ⑥ 研修員①報告書 「Japanese Gastroscopy Training」
- ⑦ 研修員①報告書 (日本語訳)「日本での胃内視鏡研修」
- ⑧ 研修員②報告書 「Learning in Takayama」
- ⑨ 研修員②報告書 (日本語訳)「高山での学び」

(滋賀県東近江市 ― 中華人民共和国湖南省常德市)

- ⑩ 自治体報告書 「令和6年度自治体職員協力交流事業の報告」
- ⑪ 研修員報告書 「自治体職員協力交流研修員研修報告書」

(鳥取県 ― 中華人民共和国吉林省)

- ⑫ 自治体報告書 「令和6年度自治体職員協力交流研修員の鳥取県研修」
- ⑬ 研修員報告書 「自治体職員協力交流研修員研修報告書」

(岡山県笠岡市 ― マレーシアコタバル市)

- ⑭ 自治体報告書 「マレーシアコタバル市との職員相互派遣について」
- ⑮ 研修員報告書 「Wonderful Journey in Kasaoka city」

- ⑯ 研修員報告書（日本語訳）「笠岡市での素晴らしい旅」

（高知県梶原町 — ネパールニルカント市）

- ⑰ 自治体報告書 「ニルカント市職員を受け入れて」
⑱ 研修員①報告書 「日本に来て学んだこと」
⑲ 研修員②報告書 「梶原で学んだこと」

（大分県 — 中華人民共和国湖北省黄石市）

- ⑳ 自治体報告書 「令和 6 年度湖北省からの研修員受入について」
㉑ 研修員報告書 「日本の経済発展の経験を学び、両国の経済および文化交流を促進する」

（大分県宇佐市 — 大韓民国慶州市）

- ㉒ 自治体報告書 「姉妹都市韓国慶州市との職員交流」
㉓ 研修員報告書 「宇佐市で過ごした 6 か月間の足跡」

「岩手県と大連市の架け橋として」

自治体名	岩手県
研修員名	夏 冬（か とう）
出身国	中華人民共和国
研修分野	経済交流
研修期間	11 か月（来日時点からの月数）
主な研修先	商工労働観光部 産業経済交流課

1 背景・目的

岩手県と中華人民共和国大連市とは、地域間連携の強化を目的として、平成 19（2007）年 5 月に「地域間連携の推進に関する協定」を締結し、また、翌年 1 月には同協定に基づき、職員の相互派遣交流を行うことを定めた「公務員交流研修覚書」を締結。平成 24（2012）年 12 月には「岩手県による大連市職員の派遣研修の受入に係る覚書」を締結し、産業・文化・学術分野等多方面における交流や、職員の相互派遣交流により、極めて良好な関係を構築しているところ。

※ 新型コロナウイルス感染症の影響により、職員の相互派遣交流は一時中断。受入は令和 5 年度から、派遣は令和 6 年度から再開。

2 研修の概要

夏研修員の受入に当たっては、本県が重点的に取り組んでいる対中国経済交流事業を中心に経済交流分野について研修することを基本とした。

《主な対応実績》

- （1） 中国からの訪問団等の受入に係るアテンド
 - ア 大連事務所による県内企業等訪問同行
 - イ 雲南省青少年岩手県訪問団訪問同行
 - ウ 中国バイヤー招へい企画理事招宴同行 等
- （2） 会議等出席
 - ア 大連市老朋友懇談交流会
 - イ 香港事業に係る山形県庁へのヒアリング同行 等
- （3） その他（文化紹介等）
 - ア 海外情報発信に係る取材（県内各地）
 - イ 「みちのく潮風トレイル体験研修」参加
 - ウ 「三陸・陸前高田の地域資源をフルコースで体験するトレイル&ジオツアー」参加

3 成果・課題

夏研修員については、日々日本語能力の向上と円滑なコミュニケーションに努め、研修や休日の活動、職員をはじめ県民との交流を積極的に行っていた。分からない言葉や文化はその場で確認するなど、日ごろから語学や日本文化について理解を深めようとする姿勢が感じられた。

出身地である大連市と岩手県との産業経済交流に関する研修を希望していたため、配属先と適切なマッチングを行うことができた。県が定める経済施策の方針と、地場産業や県内事業者の海外展開に向けた取組について、大連事務所による県内企業訪問等への同行を通じて実践的に学ぶことができた。

短い期間での研修であったが、夏研修員の優しく前向きな人柄による数多くの心のこもった交流を通じて、「中国とのネットワーク強化に資する人材育成と相互理解・親善友好関係の増進」という本研修事業の目的は十分に達成されたものと認識している。海外とのネットワーク強化については「いわて国際戦略ビジョン」（令和6年3月策定）において基本戦略の1つに位置付けており、今後も本事業を通し中国大連市とのネットワークの強化に取り組んでいく。



知事表敬



雲南省青少年岩手県訪問団訪問同行



海外情報発信に係る取材



大連市老朋友懇談交流会

「山川異境・風月同天 友情は長く続き」

氏 名 夏冬

出身国 中華人民共和国

受入自治体 岩手県

研修先 岩手県商工労働観光部産業経済交流課



一、本事業に応募した動機

私の出身地である中国の大連市は岩手県と 2007 年に「地域間連携の推進に係る協定」を締結しました。長年にわたり、大連市と岩手県は経済貿易、人的往来、観光など多くの分野で友好交流と協力を行い、喜ばしい成果を収めています。両地の民間交流もますます深まり、深い友情を結んでいます。そして、両地の友好的な関係をより一層深めるために自分の力を注ぎたいと思います。

二、研修の概要

1. 東京での研修

2024 年(令和 6 年)5 月 26 日、中国の湖北、湖南、雲南、吉林から来た 4 名の研修員と共に北京から飛行機で東京に移動し、日本での研修を開始しました。5 月 27 日、東京で日本、シンガポール、カナダ、韓国、ペルー、ネパール、マレーシアなどから来た研修員と友好交流を行い、中国と大連について簡単な紹介を行いました。5 月 28 日午前、日本国際交流協会はすべての研修員に対して日本語レベルの筆記試験と口頭試問を行いました。5 月 28 日午後、東京都庁を訪問して、都庁の概要と 2021 年東京オリンピックの開催状況を知りました。

2. 滋賀県 JIAM の研修

5 月 29 日午後、滋賀県大津市



図 1: 発表会の写真

にある「全国市町村国際文化研修所(JIAM)」で研修が始まりました。外国人研修員のほか、日本の各地域から来た公務員も様々な段階で研修所に通っています。私のクラスには3名の研修員がいて、他の2名は中国の湖南省と韓国から来ています。授業の内容が難しいので、最初は少し苦労しました。その間、日本の地方自治制度と経済財政課程を勉強して、基本的な理解がありました。毎日の多彩な文化交流活動の中で、この機会を利用して各国の方々にわが国の伝統文化と現在の発展状況を十分に紹介することができます。お互いに参考にして、お互いに学んで、更に理解と友情を増進します。6月15日-16日、滋賀県日野町を見学して、日本の農村、農業の発展の現状を理解します。日野町で日本国際交流協会主催の「homestay」に参加し、日本人の24時間の家庭生活を通じて、日本人の生活習慣と生活状態を深く理解し、互いに参考にし合い、深い友情を結びました。6月21日、京都市民防災センターに行き、地震、洪水、消防、土石流などの自然災害の対応についての知識を学びます。6月24日、滋賀県の唐崎中学校を訪問して、日本の青少年と友好交流を行います。そして「青春の力を挙げて、世代友好をはかります」と題して発表して講演します。その間、学生と交流して、日本の青少年に大連の都市風景や自然風景を紹介したり、学生の質問に答えたりしました。これから中国、特に大連へ見学に来られることを歓迎します。6月26日の修了発表会では、「大連と岩手の概要」というテーマで、修了発表がありました。パワーポイントと4分近い大連の風景を撮影したビデオを作り、発表会では25分間日本語でスピーチをしました。発表会では、まず大連の都市の概況、国際及び国内で獲得した都市の栄誉、北東アジア国際輸送センター、2024年夏季ダボス会議、現在空港の運営と新空港建設中、大連の都市風景と自然風景などの方面について紹介しました。二つ目は岩手県の概況、農業と漁業の発展状況、自然風景、世界文化遺産などの方面をめぐって簡単に紹介しました。三つ目は大連と日本、大連と岩手が長年経済貿易、人文交流、観光などの方面で得た成果について紹介します。最後に、各国の友人が自国の人民に中国と大連を紹介することを期待し、彼らが中国に来て、大連に来て歩いてみて、見てみることをできるよう歓迎します。6月27日、JIAM研修所を無事修了し、「修了証」を取得しました。

3.岩手での研修

(1) 大連市古い友人懇談交流会

東京で「大連市古い友人懇談交流会」に参加しました。大連市委員会書記熊茂平氏は大連市友好経済貿易代表団を率いて日本を訪問しました。9月10日、東京で「大連市古い友人懇談交流会」を開き、伝統的な友情を深め、交流を深め、旧友を訪ね、新しいパートナーと知り合い、友好の新しい章を書き続け、協力の新しい青写真を描きました。岩



図 2：大連市古い友人懇談交流会の写真

手県は代表団を派遣して会議に参加します。熊茂平書記は「大連は一貫して対日交流と協力を非常に重視しています。長年にわたり、皆様は架け橋の役割を十分に発揮し、積極的に奔走し、主体的な活動を行い、大連と日本の経済貿易往来の強化、人文交流の緊密化、子々孫々にわたる友好の継承のために重要な貢献をしてまいりました。熊茂平書記は、「大連と日本地方の友情は長い年月を経て新たになり、双方が何世代にもわたって丹念に育て、共に努力し、絶えず伝承してきた結果であり、我々の共通の貴重な財産であり、一層大切にし、丹念に保護しなければならない」と強調しました。中日両国首脳が達成した重要な共通認識を導き、伝統的な友情をさらに強固にし、交流を深め、海運、商業貿易、製造、文化、観光、教育、康養などの分野での実務的協力を共に推進し、大連を全方位的、多角的に宣伝し、紹介し、友情の木が実り多いものになることを心から期待しています。岩手県の佐々木副知事は熊茂平書記に、岩手県と大連市の長年にわたる経済貿易、文化、観光などの面での友好交流の状況を説明し、岩手県が震災に見舞われた際の支援に改めて感謝の意を表したほか、岩手県庁産業経済交流課での研修の様子などを説明しました。会議後、熊茂平書記は本人の日本での研修状況を尋ね、日本の先進的な管理経験を学び、両地の友好交流をさらに促進するよう切実な要望を出しました。大連市古い友人懇談交流会で、熊茂平書記と 60 人余りの大連市名誉市民、友好都市と協力企業の代表は共に友情を述べて、共同で協議して協力して、共に発展を共謀して、医療をカバーして、観光、健康管理などの分野の 5 つのプロジェクトに調印して、

実り多い成果を収めました。

(2) 表敬訪問

7月22日、岩手県知事に表敬し、友好交流を行います。この中で達増知事は私が日本に来てからの研修や生活状況について質問し、「岩手県はこれまでに大連市の公務員を多く受け入れている。彼らは岩手県の観



図 3：表敬訪問の写真

光、物産、文化などの知識を積極的に学び、両地の多

方面の交流に大きな貢献をしている」と述べました。大連は都市規模、人口規模が大きく、自然資源に恵まれています。観光産業が発達しています。科学技術の革新によって推進される新しい工業化のスピードが非常に速いです。大連は有名な港町で、昔から中国の対外開放の窓口です。岩手県は近年ますます拡大している対外開放の足取り、大連市は岩手県と中国の経済貿易の架け橋になって、対外開放の大連は国際事務の中でより大きな役割を果たすことを期待しています。この中で、達増知事の温かい配慮に感謝の言葉を述べました。大連市と岩手県の友情は長い歴史を持っていて、今年、達増知事は2度大連市を友好訪問して、私の市の指導者の親切な会見を受けて、そして「大連市名誉市民」の称号を授与されました。双方はまた、「中華人民共和国遼寧省大連市と日本の岩手県間の協力強化に関する追加合意書」に調印し、多くの成果を上げました。大連は中国東北地区の対外開放の先導と窓口として、日本の地方との経済貿易の往来は密接で、人文交流は広範で、協力の成果が多くて、将来性が広いです。今回の研修交流をきっかけに、両地の友好交流協力に貢献できるよう努めてまいります。このあと、達増知事に中国の特色を示す贈り物が贈られ、岩手日報がイベントを掲載しました。

(3) 岩手県の企業見学

7月25日、岩手県大連市経済事務所と岩手県大迫市の「EDEL WEIN」ワイ

ナリー、大船渡市の「成仁会」老人ホームへ商談ドッキングを行い、企業の経営管理の経験を学び、日本の養老産業の精緻化管理モデルと簡性化サービス理念を学びます。

(4) 山形県と宮城県を参観の見学に行く

9月4日、岩手県庁産業経済交流課と山形県庁と仙台市の企業で香港特別行政区の製品マーケティング、海外市場開拓の経営と管理の経験を学びます。

(5) 岩手県の企業と交流

11月16日、岩手県の多くの県、市、町の企業から旅行観光、電子医療機器、生物科学技術、環境保護、食品日用品、健康養老などの業界分野をカバーする博覧会が行われました。pr映像を見たり、現場見学をしたり、交流したりすることで、岩手県の企業概要、経営方式、管理経験などを学びました。同時に、関連企業に大連市海洋分野の企業誘致プロジェクトを紹介し、プロジェクトの概況、投資規模、投資環境、政策支援などの方面をめぐって関連プロジェクトを詳しく紹介します。今回の展示会を通じて、両地の相互理解を深め、日本との未来の協力の展望を学び、両地の優位性の相互補完と協力共栄を促進しました。

(6) 関連経済貿易の経験を学ぶ

岩手県庁と中国の台湾省「裕毛屋」を会社に貿易商談、岩手県内の関連企業への支援、台湾省販路をひろげました。

(7) 岩手県庁で理論や経験を学ぶ

岩手県の公務員管理制度、観光管理、航空分野の発展、農産物の生産とマーケティングなどについて、授業や座談会、見学などで学びました。

(8) 岩手県資源循環利用状況を学ぶ

12月12日、岩手県葛巻町畜産開発公社を見学しました。岩手県の山間部は森林が深く、畜産業が盛んです。近年、一方では、畜産飼育規模の拡大による家畜の排泄物による環境問題も起きています。一方、家畜の排泄物は有機物、窒素、リンを多く含み、土壌改良剤や有機肥料としての価値が高いとされています。そこで、「畜糞メタンガス工場」と「木質バイオマスガス化発電」システムを利用して、排出された生ごみや家畜の排泄物を処理して液肥を抽出し、熱、電気、有機肥料を効率的に回収してリサイクルすることが、資源不足や環境汚染を解決するカギとなっています。見て学んで、循環経済産業の発展は資源の

循環利用の働力であることを理解して、廃棄物を再利用可能な資源に変換するだけでなく、原生資源への依存を減少させるだけでなく、新たな経済成長ポイントを作成します。このモデルでの産業活動は設計段階から製品の全ライフサイクルを考慮に入れて、生産、使用、廃棄の各段階で最大限に資源を節約し、環境を保護します。政府は政策上の優遇、資金支援などの方法を提供することによって、企業を循環経済産業に投入することを奨励し、産業間の協同協力を促進し、好循環の産業チェーンを形成することができます。

(9) 岩手県濱海旅行の発展状況を学ぶ

12月1日、岩手県陸前高田市で、岩手県の海辺の観光の発展ぶりを学ぶ観光講座に参加します。岩手県は長い海岸線を持ち、観光と海が深く関わっています。海岸観光の発展のために、岩手県は「三陸海岸観光歩道」、「海岸冰雪温泉」、「三陸海岸観光列車」などの海岸観光プロジェクトを開き、大勢の観光客が訪れました。

(10) 雲南省の青少年代表団の友好交流の訪問行事

雲南民族大学附属高級中学、昆明理工大学附属高級中学、昆明潤城学校の3校の教員と学生からなる雲南省青少年代表団20名は、2024年7月15日から22日にかけて岩手県を訪問し、友好交流を行いました。岩手県の佐々木副知事は代表団一行と会見し、16人の学生に「岩手親善大使」の証書を授与しました。二人の学生が代表して、日本の青少年と知り合うこ



図4: 上田中学校での写真

とを期待して、手を携えて同行します。学校交流、市民交流、見学体験などが含まれています。代表団は岩手県の上田中学校、不来方高校、釜石中学校の特色ある3つの中学校を訪問しました。両国の青少年は交流の中で学び合い、交流の中で友情を深めます。青少年代表団は日本の学生たちと同じ授業を行い、太鼓、茶道、家庭料理など日本の伝統文化を体験する授業を行いました。専門家による講座、キャンパス見学、交流交流などを通じて、日本の教育について深く理解し、日本の同世代の学生たちと知り合いました。学生はまた日本の田

舎の生活を体験して、日本の家庭に入って、近代的な農業と農村の建設の中で持続可能な発展の理念を体得しました。

(11) 岩手県国際交流協会での訪問

佐藤理事長は両地が友好交流協力関係を築いて以来の協力の成果を振り返り、経済協力、人文交流、教育交流などのメカニズムの協力プロジェクトは双方の共通認識を凝集し、学び、共同発展を促進する重要なプラットフォームになったと述べました。両地の民間交流熱をさらに強化し、実務協力を開拓・深化し、交流の内包を絶えず豊かにし、両地の友好関係のレベルを向上させることを希望しました。岩手県国際交流協会が主催する「国際文化講座」には、岩手県から多くの外国人が参加しています。講義では、各国の言語、習慣、行働の文化の違いを共有し、異なる文化背景のコミュニケーションの方法を理解し、尊重します。交流を通じて、お互いに文化の違いに対する認識を深め、異文化交流の能力を鍛えました。

(12) 大連市企業家代表団の訪問

3月18日、花巻市では大連市企業家代表団の歓迎レセプションに参加しました。これらの企業は大連でも有名で、生物医薬、食品、水産物の加工、商業貿易などの企業があります。皆は宴会で一緒に交流して、自由に話して、貿易協力などの問題について話し合って、友好的な雰囲気の中で深い友情を築きました。双方は交流の中で伝統的な友情をさらに強固にし、交流を深め、古い友人を訪ね、新たなパートナーと知り合い、友好の新たな章を書き続け、協力の新たな青写真を描きます。岩手県産業経済交流課の同僚は宴会に参加して、大連市と岩手県の経済方面のドッキングを円満に完成して、両地の友好交流と協力を推進します。この席で企業家の代表は「大連は一貫して対日交流と協力を重視している」と強調しました。

三、帰国後の展望

中日両国人民の友好交流は2000年余りにわたって続き、世界の民族交流史上の奇跡と言われています。長い歴史の中で、中日両国人民は学び合い、参考にし合い、溶け合い、それぞれの国の発展と進歩を促し、東アジア文明と世界文明の宝庫を豊かにしてきました。

大連市と岩手県の友情は時を経て新たな活力を帯びており、両者が精心に育

て、共に努力し、絶えず引き継いできた結果であり、私たち共通の貴重な財産です。これを大切にし、守る必要があります。両地がさらに伝統的な友好関係を固め、交流を深化させ、商貿、文化、観光、教育、健康管理などの分野での実務的な協力を推進し、友好の木がさらに豊かな実を結ぶことを期待しています。

将来、大連市と岩手県の経済貿易、友好協力に貢献したいと思います。私たちの若い世代の努力を通じて、中日の友情が長続きすることを心から願っております。

「研修公務員 チェ・ホジン氏の受入について」

自治体名	福井県 敦賀市
研修員名	チェ・ホジン
出身国	大韓民国
研修分野	一般行政
研修期間	6か月
主な研修先	観光誘客課

1 背景・目的

敦賀市の海外の姉妹都市は大韓民国の東海市、ロシア連邦のナホトカ市、中華人民共和国の台州市の三都市であり、大韓民国の東海市とは昭和56年（1981年）に姉妹都市盟約を締結しました。姉妹都市間の交流の一つとして東海市との研修公務員の相互派遣・受入は、平成4年（1992年）に始まり、チェ・ホジン氏は19人目の研修公務員受入となります。研修公務員の相互派遣・受入は隔年で半年間、職員を相互に派遣し、他の交流事業ではなかなか実現できない長期的な滞在と体験を通して、地方行政の国際化・専門家への対応を促進することを目的としています。

2 研修の概要

敦賀市における研修では、本人の研修希望分野である観光関係部署を中心に、産業経済部や教育委員会等、複数の部署で実施しました。最も長い期間研修を実施したまちづくり観光部では主に観光誘客課にて、市内観光施設等の視察や市外での観光PRに同行していただきました。姉妹都市交流事業として、韓国東海市から青少年が訪れた際には、通訳や引率のお手伝いもしていただきました。また、モニターツアーにご参加いただき、インバウンド目線での評価等をしていただく機会もありました。

市内で開催されているイベント等にも積極的に参加され、自国で開催されているイベントと比較しながらそれぞれの長所短所を見つけられたと話していました。そのほかの部署でも、現場視察や地域行事への参加などを通じて、敦賀市の施策について理解を深められていました。

また11月には、福井県国際交流協会主催の交流イベント「おちゃっとサロン 韓国」にて、韓国や海外に関心のある一般市民向けの韓国文化講座の講師も務めていただきました。

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

チェ・ホジン氏が希望する部署を中心に、様々な分野での研修が行われるよう配属部署の調整を行いました。研修期間中は、本人から毎月提出される月次報告書を通じて、各部署での研修内容や業務外での活動などを把握するとともに、日本での生活で困っていることがないかを確認しました。また、受入自治体としても研修員が研修の中で感じたことや自国との比較などを業務の参考とするため、報告書を研修実施部署にも共有す

るようにしていました。2泊3日の県外研修も実施し、チェ・ホジン氏が研修内容として希望していた日本の観光政策の取り組みについて、他県での事例等も学ぶことのできる機会を設けました。

そのほか、市の広報誌に継続して研修員の記事を掲載することで、敦賀市が取り組む国際交流事業や研修員の存在をより多くの市民に周知することを心掛けました。地元国際交流団体との交流会では、広報誌の記事を毎月楽しみにしていると話す方もおられ、周知につながったのではないかと考えています。

3 成果・課題

チェ・ホジン氏は、来日前は独学で少し日本語を勉強された程度で、来日当初は日本語でのスムーズなコミュニケーションが難しい状態でした。本人としても日本語能力を最も課題と感じている状況でした。しかし、約1か月間のJIAM研修や敦賀市における週3回の日本語レッスン、個人的な勉強などにより日本語能力は徐々に上達され、帰国間際には簡単な日本語での会話は問題なくできるようになっていました。さらに、敦賀市では、東海市との間で相互に職員を派遣していることから、来年度敦賀市から東海市に派遣する職員が決まった段階で、お互いにコミュニケーションを取るようにもなりました。来日当初は日本語の自信のなさなどから消極的だった職員とのコミュニケーションについても、派遣職員との会話をきっかけに自分からも少しずつコミュニケーションを取る様子が見られるようになりました。派遣職員同士の関係が構築されることで、来年度からの派遣についてもよりスムーズになるのではないかと考えます。

受入自治体側としても姉妹都市からの研修員受入が姉妹都市である東海市について知るきっかけにもなり、双方にとって姉妹都市についての理解を深める良い機会となったと思います。

チェ・ホジン氏には、今回の研修で得た経験を東海市での業務に活かしていただき、東海市と敦賀市との架け橋として今後も活躍されることを期待しています。

青少年交流事業にて



国際交流団体との交流会



④

「日韓行政システムの比較と学び」

氏 名

崔 皓進 (チェ・ホジン)

(Name)

出身国

大韓民国 (Republic of Korea)

(正式名称をお書きください)

(Country)

(Write the official name of your country)

受入自治体

福井県敦賀市 (自治体名は都道府県から)

(Name of prefecture and municipality)

(Host Institution)

研修先

敦賀市役所観光誘客課ほか

(Name of specific department/division/facility)

(Training Facility)

where specialized training was held)



1 本事業に応募した動機

(Reasons for applying for this program)

普段、日本に対する関心はありましたが、条件が合わなくて申請を延ばしていたところ、韓国に研修に来た敦賀市の職員と対話をしていたところ、日本が気になり、人生の良い経験になるだろうと思って研修を申請しました。

2 研修の概要

(Summary of Training)

行政処理システムの比較と適用

(What did you learn?)

何かを新しく学ぶというよりは韓国と日本の行政処理システムの差を発見することが目標でその差でもっと良い処理方法を探し出したかったです。行政システムは常に両面性を持っていますが、市民の便宜を優先することと行政システムを優先することに常に悩む必要があるからです。韓国と日本は似たような行政処理システムで運営されていますが、両国で運営する方法が少しずつ違う部分があり、日本でよりうまく運営されていることもあります。市民の利便性を考える際に適用には悩んでみる必要があることも発見しました。韓国に帰って日本のいいところをどう適用してみるか悩んでみるつもりです。

3 帰国後の展望

(Plans upon returning to your home country)

(本事業で得た成果を帰国後どのように活かしたいか)

(How would you apply what you have learnt on the program?)

まず、敦賀市で印象深かったのはゴミの処理方法でしたが、街をきれいで臭わないようにうまく管理されていました。しかし、ゴミの排出曜日までにゴミを家の中に保管しなければならないとか、コミステーションという特定の場所までゴミを捨てに行かなければならない不便さもあるのも事実なので、このような住民の便宜と行政効率性を同時に極大化する方法を考えてみなければならないようです。

次は各種イベント、イベントのための広報マーケティングに関する部分ですが、日本の伝統文化を基盤とする広報マーケティングが多いということです。韓国は最近のトレンドな文化を基盤とする未来志向的なマーケティングやデザインを主にするため、日本の伝統文化を基盤とするマーケティングもかなり興味深いと感じましたが、このような点も観光広報マーケティング要素に適切に適用して試みることができると思います。

この他にも多くの類似点と差異点がありましたが基本的な枠組みはほとんど同じだということがもっと興味深く感じられて韓国に帰っても持続的にベンチマーキングを試みるつもりです。



現場視察の様子



イベント参加の様子

「高山市の自治体職員協力交流事業の活用について」

自治体名	岐阜県高山市	
研修員名	① 楊 鎮英 (Yang Zhenying)	② Lucero Urpi Baca Ramirez
出身国	中国	ペルー共和国
研修分野	医療	ごみ処理・環境政策・友好都市関係
研修期間	7 か月 (来日時点からの月数)	6 か月 (来日時点からの月数)
主な研修先	高山赤十字病院	秘書交流課 資源リサイクルセンター 環境政策課

1 背景・目的

高山市と中華人民共和国・麗江市は、美しい山々に囲まれた旧市街地に木造の伝統建築が美しく保全されている共通点を有することから交流が始まり、平成 14 年 3 月に友好都市提携を結んだ。平成 16 年に第一期生の受け入れを開始し、令和 6 年度までに同市より計 23 人の研修員を受け入れてきた。研修内容は観光、農業、畜産、教育、文化財など、幅広い分野で実践的な研修を実施し、平成 27 年には高山市内の病院と協力協定を締結し、以降毎年麗江市から医師の受け入れを行っている。

また、高山市とペルー共和国・ウルバンバ郡とは、平成 23 年 4 月に当時のペルー大使より高山市とウルバンバ郡との交流について提案されたことを受け、平成 25 年 8 月に友好都市提携を結んだ。平成 27 年に自治体職員協力交流事業を活用し、ウルバンバ郡から研修員の受け入れを開始、令和 6 年度の受け入れで 6 人目となる。研修員はウルバンバ郡の課題でもある環境対策やごみ処理に重点を置いて研修を行っている。

当市においては、新型コロナウイルス感染症の影響により、一旦は交流が中断したが、令和 6 年度より再開となった。職員の受け入れを継続することで、帰国後も研修員が両市の架け橋となって相互交流を強化していくことを効果として期待している。

2 研修の概要

① 楊 鎮英

麗江市から派遣された楊 鎮英さんは、麗江市人民病院では内科医として勤務していることから、高山市内の総合病院の高山赤十字病院で研修を行った。また、専門が消化器内科のため高山赤十字病院でも消化器内科を中心に研修を行った。主な研修は胃カメラの技術や検査等であった。また、同院は外国人患者の受け入れを行っており、中国人患者が搬送された際には、通訳とし

でも活躍した。

② Lucero Urpi Baca Ramirez

ウルバンバ郡から派遣された Luceroさんはゴミ処理や環境政策の他、姉妹友好都市交流の分野で研修を実施した。Luceroさんの出身地であるウルバンバ郡ではごみ処理の問題を抱えているため事務的な研修だけでなく、資源リサイクルセンター（ゴミ処理）、森林・環境政策部などの現場研修も行った。研修の主な内容は、リサイクルに関わる業務やグリーンエネルギー関係の施設訪問などの他、他の国との国際交流事業にも参加した。

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

① 楊 鎮英

初めての海外渡航、一人暮らしであったため、本人も最初は不安が大きかったようだが、来日直後の日本語研修でクレアと JIAM から手厚いサポートを受けたり、日本語の学習をしたり、他の研修員との交流をすることで少しずつ環境に慣れていった。中国語が堪能な国際交流員が病院とのやりとりを支援し、生活面でもサポートを行った。また、日本国内でも医療行為が行えるように国から外国医師の臨床修練許可を取得し、受け入れ先の病院とも協定書を締結することでスムーズな研修が行えるように配慮した。当市役所の日本語教室に通って日本語能力向上のため勉強をしてもらった。また、高校生を中国へ派遣する際の学習会では、麗江市の説明や中国語を教える機会を提供した。

② Lucero Urpi Baca Ramirez

初めての一人暮らしで、最初は不安が大きかったようだが、来日直後の日本語研修でクレアと JIAM からの手厚いサポートで、日本の生活に少しずつ慣れていった。コミュニケーションをとることで苦労する面も多かったが、通訳アプリを活用した言語面のサポートや、国際交流員による英語での生活場面のサポートなどを行った。本人も翻訳アプリを、コミュニケーションをとる際や日本語の資料を読む際に上手に活用していた。また、本人や派遣元自治体の希望を最大限取り入れ、体験型の研修もなるべく取り入れることで効果的な研修になるように努めた。当市役所の日本語教室に通って日本語能力向上のため勉強をしてもらった。

一方で、日本の夏の暑さが苦手で、直射日光を浴びると、皮膚の痒みがあるため、夏の期間はできる限り室内の作業となるよう配慮した。



楊さんの市内病院での研修の様子



Lucero さんの資源リサイクル
センターでの研修の様子

4 成果・課題

コロナ禍により 5 年間の中断はあったが、令和 6 年度から当事業を再開することができた。両自治体と当市をつなぐ職員がまた 2 名増え、友好交流のネットワークを強化することができた。

研修員は専門研修のほか、姉妹友好都市関係のイベントや事業に参加した。また、当市国際協会で開催している日本語講座へも通うほか、現代風茶道や生け花も体験し、日本の伝統文化を通して市民と交流しながらそれぞれの出身国を紹介することもできた。

今後も研修員の受け入れを重ねることで、両市の絆をより深め、さらに広い分野での交流に発展させることが重要だと考える。また、職員の異動があっても、継続して関係が保てるようしっかり引き継いでいく必要がある。

「Japanese Gastroscopy Training」

Name	Zhenying Yang
Country	China
Host Institution	Takayama City, Gifu Prefecture
Training Facility	Takayama Red Cross Hospital



1. Reasons for Applying to this Program

I applied to the LGOTP Program with the aim of improving my academic knowledge, getting in touch with international cutting-edge research, enhancing my practical ability, and broadening my international perspective. Through the study of gastroenterology in Japan, I hope to improve my professionalism and to achieve both personal, academic, and professional development.

2. Summary of Training

During the course of the training, I learned about gastric anatomy, physiology, pathology, and the operation techniques of gastric mirrors. During the course of



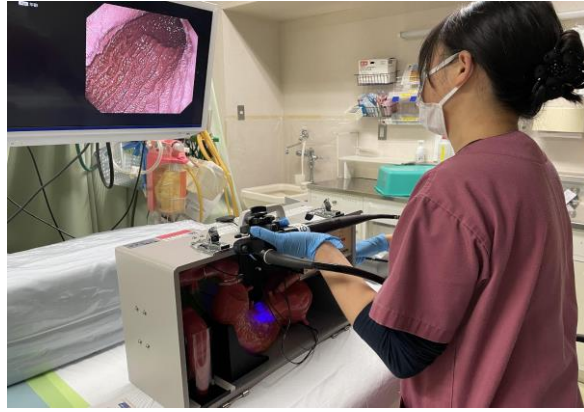
Gastroscopy

practical operations, I mastered the skills necessary to operate a gastroscope and independently completed regular gastric examinations as well as live examinations. At the same time, I also observed the techniques of large and small microscopes, ERCP (endoscopic retrograde cholangiopancreatography), ESD (endoscopic submucosal

dissection), EUS (endoscopic ultrasound), etc performed by experienced doctors of the Takayama Red Cross Hospital.

3. Post-Program Plans

I have learned a lot during my 8 months of training. I have learned many advanced internal mirror operation techniques and research methods, and these experiences have only enriched my professional knowledge and experience in endoscopy, which will provide a solid foundation for my future career development. After returning to Japan, I will continue to make efforts in learning, practicing, and constantly improving my clinical as well as scientific skills. At the same time, I will also continue to promote and apply the advanced techniques and methods I have learned. I believe that I will continue to learn new knowledge and improve the level of medical care I can provide to patients in China.



Gastroscopy Model Training



Colonoscopy Model Training



Traditional Japanese Flower Arrangement Class

「日本での胃内視鏡研修」

氏名 楊鎮英（ヨウ・チンエイ）

出身国 中国

受入自治体 岐阜県高山市

研修先 高山赤十字病院



1. 本プログラムに応募した理由

学術的知識の向上、国際的な最先端研究との接点、実践的能力の強化、そして国際的な視野の拡大を目的としてLGOTPに応募しました。日本における消化器病学の研修を通じて、専門性を高めるとともに、個人的・学術的・職業的な成長を達成したいと考えました。

2. 研修の概要

研修期間中は、胃の解剖学・生理学・病理学および胃カメラの操作技術について学びました。実技研修では、胃内視鏡の操作に必要な基本スキルを習得し、通常の胃内視鏡検査およびライブ検査を独立して実施できるようになりました。



胃内視鏡

また、高山赤十字病院の熟練した医師による大・小内視鏡、ERCP（内視鏡的逆行性胆道膵管造影）、ESD（内視鏡的粘膜下層剥離術）、EUS（超音波内視鏡検査）などの先進的な技術も見学する機会を得ました。

3. 研修後の計画

8 か月間の研修を通じて、内視鏡操作技術および研究手法に関する多くの先進的な知識を得ることができました。これらの経験は、私の内視鏡に関する専門知識と臨床経験をより一層深め、今後のキャリア形成において大きな基盤となると確信しています。

帰国後は、引き続き学習と実践を重ね、臨床および研究の両面で自己研鑽に努めてまいります。また、本研修で学んだ先端技術や知識を積極的に活用・普及させ、中国における医療レベルの向上に貢献していきたいと考えております。



胃内視鏡操作シミュレーション研修



大腸内視鏡操作のシミュレーション研修



生け花教室

Learning in Takayama

Name LUCERO URPI BACA RAMIREZ

Country Republic of Peru

Host Institution Takayama City, Gifu Prefecture

Training Facility Takayama City Hall
Environmental Policy Department
Municipal Recycling Center



1. Reasons for Applying to this Program

I decided to apply for this internship program because, although I did not have a deep knowledge of the country, I was very interested in its culture. I wanted to gain international work experience in a multicultural environment, and Japan represented a unique opportunity. In addition, its innovative approach to sustainability and environmental conservation resonated deeply with me. I felt that this experience would allow me to learn about the environmental practices and policies of a country leading in environmental policy, which would complement my academic background and strengthen my future career goals.

2. Summary of Training

In the land of the rising sun, there are profound lessons about resilience, hospitality, and sustainability that have left an indelible mark on my heart. My internship in Japan not only gave me technical knowledge, but also an immersion in a culture with a perfect balance between tradition and modernity, between past and future, and above all it taught me the value of respect for moral principles.

My journey in Japan has been a learning odyssey; during my stay in Tokyo, I received Japanese language training at JIAM Municipal National Institute of International Cultural Training, located in Otsu City, which I

consider my first home in Japan. In addition, I had the opportunity to do my professional training in Takayama. One of the most valuable lessons I learned in Takayama was the importance of sustainability and respect for the environment. The mottainai philosophy, which promotes the responsible use of resources and recycling, inspired me to rethink my relationship with the natural environment. I witnessed first-hand the country's commitment to sustainable innovation, where technology merges with green practices. Japan is a leader in the development of green technologies, such as solar energy, recycling systems, and green buildings using sustainable materials and efficient construction techniques.

In Takayama, the wastewater treatment plant not only takes care of efficient wastewater treatment, but also uses the ash generated by burning waste to create bricks, thus closing the recycling cycle in an innovative way.

The Takayama recycling center also has a holistic approach, where surplus energy is used for air conditioning, as hot water, and for melting snow melting along waste collection routes. In addition, this energy is also used to supply steam to the Koyoen and Toyourakuen homes for the elderly, demonstrating how the resources generated are reused to benefit the community. The use of dams is part of its strategy to manage water resources and generate hydropower, contributing to a more sustainable energy supply. In addition, the Takayama incinerator converts waste into electricity to power local households, demonstrating how proper waste management can be a source of renewable energy.

3. Post-Program Plans

Although Peru differs markedly from Japan in economic, social, political, cultural, and environmental aspects, it is a country that embraces continuous learning. Therefore, it is essential to promote environmental awareness and strengthen the sense of community by working together for a common goal. One of my main objectives is to initiate a recycling program, as Urubamba has a landfill that receives 15 tons of solid waste per day, and its capacity is rapidly decreasing. Therefore, it is urgent to reduce the generation of solid waste. Thanks to the training I received at the Takayama recycling center, I have acquired tools that I plan to put into practice when I return to Peru.



Environmental Policy Department



Tour at Water Treatment Plant



Tea Ceremony



Bottles Collected at the Recycling Center

高山での学び

氏名 LUCERO URPI BACA RAMIREZ
(ルチェロ・オルピ・ヴァカ・ラミレズ)

出身国 ペルー

受入自治体 岐阜県高山市

研修先 高山市役所環境政策課
資源リサイクルセンター



1. 本プログラムに応募した理由

このインターンシッププログラムに応募することを決意しました。日本について深い知識があったわけではありませんが、その文化に強い関心があり、多文化環境における国際的な職務経験を得たいと考えていました。日本はそのような経験を積むための、非常にユニークな機会であると感じました。

特に、持続可能性や環境保全に対する革新的な取り組みに共感し、環境政策の先進国である日本における実践的な知識を学ぶことが、自身の学術的背景を補完し、将来のキャリアに大きく貢献すると確信しました。

2. 研修の概要

「日出ずる国」と言われる日本での研修を通じて、私は「レジリエンス（回復力）」「おもてなしの心」、そして「持続可能性」に関する多くの学びを得ることができ、これらの教訓は私の心に深く刻まれました。

日本でのインターンシップは、単なる技術的な知識の習得にとどまらず、伝統と現代、過去と未来が調和した文化の中に身を置き、「倫理的価値観を尊重する姿勢」の大切さを学ぶ貴重な機会となりました。

日本での学びの旅はまさに「学びのオデッセイ」でした。東京滞在中は、大津市にある全国市町村国際文化研修所（JIAM）にて日本語研修を受けました。そこは、私にとって日本での「最初の家」のような場所です。

その後、私は高山市で専門研修を行う機会をいただきました。高山で学ん

だ最も価値のある教訓の一つは、「持続可能性」や「環境への配慮」の重要性です。特に「もったいない」という哲学から、資源の有効利用やリサイクルの重要性を学び、自分と自然との関係を改めて見直すきっかけとなりました。

日本は、太陽光発電、リサイクルシステム、持続可能な素材を使ったグリーンビルディングなど、グリーン技術の分野において世界をリードしています。

高山市の下水処理場では、効率的な排水処理を行うだけでなく、ごみ焼却によって生じた灰を再利用してレンガを製造し、資源循環の仕組みを構築しています。

高山市の資源リサイクルセンターでも包括的な取り組みが行われており、余剰エネルギーは冷暖房や給湯、さらにはごみ収集ルートでの雪を溶かすためにも利用されています。さらに、このエネルギーは、高齢者施設である紅葉園や豊楽園にも蒸気として供給されており、地域社会への還元が実現されています。

また、水資源管理および水力発電を目的としたダムを活用、さらには焼却炉での廃棄物発電による家庭への電力供給など、日本の適切な廃棄物管理が再生可能エネルギーの源にもなっている点に、深い感銘を受けました。

3. 今後の計画

ペルーは経済、社会、政治、文化、そして環境の面において日本とは大きく異なりますが、継続的な学びを大切にする国でもあります。そのため、地域の人々と協力しながら環境意識を高め、コミュニティとしての一体感を強めることが重要だと考えています。

私の主な目標のひとつは、リサイクルプログラムを立ち上げることです。というのも、私の故郷であるウルバンバ市には1日15トンのごみが運び込まれる埋立地がありますが、その容量が急速に限界に近づいているからです。したがって、廃棄物の発生を抑制する取り組みが喫緊の課題となっています。

高山市資源リサイクルセンターでの研修を通じて得た知識と技術を活かし、帰国後はそれらを実践に移し、地域社会に貢献していく所存です。



環境政策課



浄水場見学



茶道体験



資源リサイクルセンターで
回収されたペットボトル

令和 6 年度自治体職員協力交流事業の報告

自治体名	滋賀県東近江市
研修員名	肖 雨晴
出身国	中華人民共和国
研修分野	一般行政
研修期間	6 箇月（来日時点からの月数）
主な研修先	農林水産部、福祉部

1 背景・目的

本市は、中国湖南省常德市と 1994 年（旧八日市市と締結）に友好都市として提携締結して以来、友好親善使節団を相互に派遣するなどの交流を行っています。締結の翌年から両市の相互理解、経済発展及び友好関係の増進に貢献する人材を育成することを目的として職員の研修交流を開始し、今年度で 22 人目の研修生を迎えました。本制度の活用では 6 人目となります。

2 研修の概要

研修希望分野である農業や高齢者福祉について、本市の農業の現状や介護保険の仕組み等の座学研修、農園や高齢者施設など様々施設の見学などを通して学びを深められました。農業や高齢者福祉分野の以外にも観光、歴史文化、地域医療などに関する行政の取組など多岐に渡って研修に取り組みました。

東近江市の国際交流団体における研修では、茶道や百人一首など日本文化に触れる体験に取り組みました。

また、中国及び常德市の文化について東近江市民に向けて発表を行ったり、東近江市から派遣した友好親善使節団が中国常德市に滞在中は通訳として帯同するなど両市の懸け橋として重要な役割を果たしました。

3 研修実施に当たって工夫、苦労したこと

肖研修生は、日本語能力が非常に高い上、真面目でひたむきな研修姿勢が見られたため、随時研修内容についてヒアリングを実施し、農業及び高齢者福祉分野の研修だけではなく、日々の中で関心を持った分野の研修を受けられるよう調整を図りました。

また、市民や市職員との交流を深めるため、地域で行われる行事や祭事にも参加をしてもらいました。

これらのことを通じて、行政研修はもちろん、研修では体験できない日本での習慣、考え方などについて学ぶことができたと思います。

4 成果・課題

全ての研修において、常德市（及び中国）と比較しながら研修を進められたことで、東近江市（及び日本）との違いを認識し、学ぶことができたことは、肖研修生にとって成果を得られたことと思います。

また本市の職員にとっても常德市（及び中国）との文化や考え方の違いを知るきっかけとなり、意識の向上にも繋がったと感じます。

最大の成果は、各種の研修や交流を通じて両市の友好親善に努められたことだと考えられます。研修を通じて、多くの職員や市民と交流し、友好を深めました。このことは、肖研修生の高い日本語能力と持ち前の明るい人柄、そして東近江市への愛着が生んだものであると感じます。様々な機会を通じて、多くの市民が東近江市の友好都市中国・常德市を認知し、身近に感じることをできたと考えられます。

肖研修生が本市で学んだことを、ぜひ中国での業務に生かしていただくとともに、また今後の両市の友好の懸

け橋となることを期待しています。



農業の機械化に関する研修



日本文化体験（茶道）

自治体職員協力交流研修員研修報告書

氏 名 肖 雨晴
出身国 中国
受入自治体 滋賀県東近江市
研修先 東近江市役所企画課



1 本事業に応募した動機

私の勤務先中国常德市石門県では、山地が多く、高齢者が多く、耕作地の作付面積が年々減少し、産業発展のための育成・管理方法が乏しく、特色ある産業が形成されていなかった。

日本は一人当たりの耕作可能面積が少なく、土地資源が少ない中で、農業産業が発達しています。これは、まず、日本の農業育種の品質が高く、成熟した栽培規範を持っていることによるものであります。日本は農業の発展の中で「1県1品、1村1品」の戦略を実施して、例えば岡山晴王ブドウなどの農産物の普及はとても良い効果を得ました。次に、日本の農業は機械化が進んでいる。日本では1975年に稲作の機械化生産システムが確立され、耕地整地、田植えから収穫までの全工程生産が実現され、農業生産の効率が向上しました。さらに、東近江市政府は農業の発展に対して多くの政策補助を提供していました。例えば農業財政補助金や優遇貸付などの措置は、農業の発展を積極的に推進しました。

滋賀県東近江市の産業育成や営業のノウハウを学び、地域の特色ある産業を作っていきたいと考えています。

2 研修の概要

東近江市役所で地方自治体行政について学びました。東近江市に農業に関する施設を見学したり、歴史や伝統文化について見て学んだり、民間組織を訪問したり、教育や福祉に関する施設も見学しました。東近江市のイベントである木地師フォーラムの際には、市役所の職員と一緒に準備して参加しました。最後に、東近江市の姉妹都市である韓国・場



岩面の使節団を受け入れ、使節団と一緒に東近江市内を視察しました。

1.農業制度。私の故郷中国の常德市では、農業の機械化のレベルが低いです。また、山地が多く、高齢者も多くため、耕作地の作付面積が年々減少し、特色ある農業が形成されていません。でも、東近江市は自然豊かな場所で、近畿最大の耕地面積を誇る一大穀倉地帯を形成しており、多種多様な農産物を生産しています。また、畜産業も盛んで、日本三大和牛の一つである「近江牛」の生産も行われています。この半年間の研修を通して、東近江市の農業推進や管理のノウハウを学びました。

2.福祉政策。福祉の分野について、中国は日本に比べると政府の支援はまだ足りないと感じました。日本は高齢化問題が深刻化しているので、十分な戦略計画と人口高齢化に対応する膨大な法律体系の確立とより完備された社会保障システムを構築しています。福祉施設では長期的なサービス、短期的なサービス、ディサービスとグループホームなど様々なサービスを提供しているため、高齢者にとってすごく便利だと感じました。東近江市保健センターと子育て支援総合センターにも見学に行きました。その複合施設では、「妊娠・出産・子育て・健康づくり・介護予防」など、子供から高齢者まで切れ目ない支援を行い、市民が触れ合える場と地域の防災拠点を併せ持つ施設となっています。日本の子供に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、情操を豊かにすることを目的としています。中国には、このような福祉施設は別々になっており、複合施設は市民にとってとても便利です。



3.移住政策。東近江市は独自の支援制度を設けて、地方移住者の確保に力を入れています。「定住移住相談会」や「ふるさと暮らしセミナー」などのイベントに出展し、移住希望者のサポートを行っています。その上、ホームページ上でも移住の情報を公開しています。また、地方移住に関するパンフレットや資料がずらりと並ぶ「資料コーナー」があり、興味のある地域のパンフレットを気軽に入手できます。東近江市では市民のために、就労支援、空き家改修事業、育児補助などのサポートを提供しています、本当に素晴らしい、勉強になりました。



3 きこくご 帰国後の展望

児童虐待は国境を超える共通の問題であり、親子の間の最も深刻な問題であると言えます。日本では、介入より支援が強調され、虐待の未然防止が重

視されています。児童の人身・心理侵害の程度などの面から見ると、対応が早ければ早いほど損害が少なくなりますが、中国では、国を中心とする早期予防施策が不十分です。中国の農村部では、ネグレクトを引き起しやすい留守児童問題が深刻であり、児童虐待の未然防止に対する対応が必要であると考えられます。その対応のあり方として、日本における児童虐待の未然防止施策を参考にする必要があると思います。

そのほか、日本のボランティア制度と共同募金制度が活用できると思います。日本の各分野のまちづくりにはボランティアが活躍しています。国際交流協会だけではなく、福祉施設や民間組織にもボランティア制度が導入されています。また、街の福祉や災害被害者支援などのため、共同募金制度があります。共同募金は、ボランティア活動の費用や障害者作業所の車の整備や社会福祉施設の改修まで、さまざまな民間社会福祉活動を支援しています。中国でボランティア制度は普及していません。市民の主体性を向上させるため、ボランティア制度や共同募金制度を中国で進めて行きたいと思います。

最後、中国は日本農業の経験を参考して、資金手当、人材輸送などを通じて援助を提供して、それに民間の力で特色のある農業を発展します。農業協会組織を設け、農業生産にサービスと指導を提供して、農業のリスクと投資要求を下げ、この上に農民の利益を保障し、農業の科学技術レベルを高めます。中国は日本の作り方を参考して、もっと厳しい農産物安全基準と監督メカニズムを立て、この上に農産物の安全と品質を保証します。

「令和6年度自治体職員協力交流研修員の鳥取県研修」

自治体名	鳥取県
研修員名	郝慶文（ハオチンウェン）
出身国	中華人民共和国
研修分野	国際交流、まんが行政、観光行政、文化財行政 等
研修期間	10 か月
主な研修先	輝く鳥取創造本部観光交流局 交流推進課 輝く鳥取創造本部観光交流局 まんが王国官房 輝く鳥取創造本部観光交流局 国際観光課 輝く鳥取創造本部観光交流局 観光戦略課 商工労働部市場開拓局 販路拡大・輸出促進課 商工労働部 通商物流課

1 背景・目的

鳥取県の国際施策は「国内外の多様なチャンネル・分野での交流を通じた地域活性化の推進」であり、本事業を通じて、研修員に本県が持つノウハウを習得させるとともに、派遣元自治体と人的交流を深めることで、本県の国際交流施策への協力を得ることを期待。

2 研修の概要

研修期間（全体）	令和6年5月26日～令和7年3月21日（約10ヶ月間）	
研修期間（詳細） 及び受入先	期 間	受 入 先 等
	5月26日	来日
	5月～6月	JIAMでの日本語研修（滋賀県）
	6月27日	来県
	7月	交流推進課での研修
	7月29日	知事への着任挨拶
	8月	まんが王国官房での研修
	8月14日	しゃんしゃん傘おどりに参加
	8月17日	コナンプロモーションイベントに参加
	9月	国際観光課での研修
	9月4～6日	吉林省青少年訪問団受入
	9月25日	中華人民共和国建国75周年祝賀レセプションに参加（大阪府）
	10月～11月	観光戦略課での研修
	10月10日	鳥取県関金のサイクリングイベントに参加
	10月17日	第84回中国ブロック観光情報交換会に参加（東京都）
	11月	交流推進課での研修

	11月24日	国際交流イベントに参加（鳥取市）
	12月～1月	販路拡大・輸出促進課での研修
	12月22日	新春レセプション参加（大阪）
	2月・3月	交流推進課での研修
	3月4日	研修修了式で研修内容を発表
	3月22日	帰国

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

（１）生活面

郝研修員は日本への留学経験等がなく、赴任当初は日本語の能力の面で苦労されていました。しかし時間が経つにつれて日本語を使うことにも慣れ、年が明けるころには生活面での心配はほとんどなくなりました。県担当者とは常に連絡が取れるよう SNS で繋がっており、また生活面のサポートを鳥取県国際交流財団の担当者に委託しており、定期的に面談を行って健康状態の変化や悩みに対処できる体制を整えていました。

また郝研修員は野外でのアクティビティがとても好きで、秋ごろには鳥取県中部地域の関金でサイクリングのイベントに参加するなど、研修だけでなく趣味も楽しむことができる環境であり、充実した派遣生活を送った。

（２）研修面

郝研修員は本国では、吉林省と香港・マカオ地域との文化交流、対外管理業務等行っており、日本の観光振興、地域経済発展、さらには日本の文化や歴史について興味を持っていました。できる限り郝研修員の希望に添えるよう、観光交流局、商工労働部、商工労働部市場開拓局での研修を設定し、なるべく実務型の研修が受けられるようにしました。郝研修員からも派遣元所属での業務に活かすことのできる有益な研修であったと感想をいただきました。



中国文化紹介・体験講座

郝研修員には、研修以外にも「鳥取しゃんしゃん祭り」へ参加いただくなどし、鳥取県の伝統文化を知っていただくとともに、鳥取県に愛着を持っていただくためのきっかけづくりを提供したほか、鳥取県庁の中国事業関係部署の職員等との交流の機会も設定し、人的関係の構築にも努めました。

4 成果・課題

鳥取県は平成11年度から自治体職員協力交流研修員として中国吉林省から研修員を受入れており、これまで受入れた研修員は郝研修員を含めて22名のぼります。研修員は帰国後も本県と吉林省との交流を継続・深化させる上

で、必要不可欠の人材です。本県と吉林省は平成 6 年度に友好交流を開始し、令和 6 年度で友好交流 30 周年を迎えました。これまでの交流の歴史を振り返る上で、本事業による人的交流の成果は欠かすことのできないものとなっています。

今後も環日本海地域の友好交流地域である中国吉林省と幅広い分野で交流を促進し、交通インフラ、物流ネットワークの構築、両地域の経済発展の成果の共有等、国際感覚を育み両地域が世界に開かれた地域となることを目指し、国際交流を積極的に推進します。

自治体職員協力交流研修員研修報告書

自治体職員協力交流研修員
(中国)

氏 名 郝慶文 (HAOQINGWEN)

出 身 中華人民共和国吉林省

受入自治体 鳥取県



研 修 先	輝く鳥取創造本部観光交流局	交流推進課
	輝く鳥取創造本部観光交流局	まんが王国官房
	輝く鳥取創造本部観光交流局	国際観光課
	輝く鳥取創造本部観光交流局	観光戦略課
	商工労働部市場開拓局	販路拡大・輸出促進課
	商工労働部	通商物流課

研修内容

月 日	研修内容
5/26	日本に到着
5/27～28	東京でオリエンテーション
5/2～6/27	滋賀県 JIAM（全国市町村国際文化研修所）で日本語研修
6/27	来県
7/1～31	初登県庁，交流推進課で研修
7/2	鳥取県国際交流財団で日本語研修開始
7/19	倉吉に行って文化交流を行い、幼稚園の子供たちに中華文化をプレゼンテーションした
7/22～23	海外大学生インターンシップ受入事業活動に随行
7/29	知事表敬
8/1～30	まんが王国官房で研修
8/14	鳥取しゃんしゃん祭りに参加
8/17	まんが王国官房が開催したコナンプロモーションイベントに参加
9/2～30	国際観光課で研修
9/4	吉林省外国語学校の交流訪問団に同行して鳥取で研究を見学する 統轄監に接見され、岩美高校に行って友好交流し、浦富海岸の博物館を見学

9/5	吉林訪問団に同行して鳥取西高に行き、友好交流に行った。鳥取砂丘に行って鳥取の特色ある観光地を鑑賞し、砂丘に関する知識を研究した。砂の美術館を見学
9/6	引き続き吉林訪問団に同行し、和紙工房、奥大山ミネラルウォーター工場、大山花回廊で見学
9/25	大阪中国総領事館が開催した中華人民共和国建国 75 周年記念レセプションに参加
9/26	歴史が長く、規模が大きく、堅固で美しい大阪城を見学
10/1～31	観光戦略課で研修
10/9	午前中は砂丘観光に関する事業者との意見交換会に参加 午後は観光業務の改善に関する会議に参加
10/10	午前中、倉吉関金温泉近くの山間部を自転車で走るアクティビティに参加 午後は大阪万博鳥取の準備会議に参加
10/17	東京都道府県会館に行って、第 84 回中国ブロック観光情報交換会に参加
11/1～29	交流推進課で研修
11/24	国際交流イベントに参加し、交流員や留学生と一緒に中国伝統文化を紹介。ハーモニカで「我愛你中国」を演奏
11/27～28	吉林訪問団を案内し、政要と面会した後、砂丘と砂の美術館を観光
12/2～27	販路拡大・輸出促進課で研修
12/2	鳥取産業未来フェス見学、境港ビジネスセンターでの交流会に参加
12/12	NW 会議参加
12/22	大阪に中国駐大阪総領事館が主催する新春レセプションに参加
2/7	米子市で開催された未来産業大会に参加
2/12	海外展開支援機関実務者ネットワーク会議に参加
2/26	香港・台湾の経済概況について講座参加
3/4	研修発表会参加
3/11	歓送会参加
3/21	帰国

1. 研修報告

(1) はじめに

私は吉林省外事弁公室に勤務しており、これまで吉林省と香港・マカオ地域との文化交流、機関の人事管理、対外管理業務に携わってきました。業務では、大学や高等教育機関、人力資源・社会保障部門、文化・観光・商務協力部門など、多くの関係機関と連携して仕事を進めています。

吉林省は中国東北地方の中心部に位置し、面積は 18.74 万平方キロメートル、常住人口は 2339.41 万人に達し、中国の 9 つの国境省の一つです。1994 年、鳥取県と吉林

省は友好交流覚書を締結し、それ以来、経済・文化・教育などの分野で多様な交流を展開し、豊かな成果を上げてきました。

鳥取県と吉林省の友好交流を促進し、また吉林省の経済・社会発展に貢献するため、私は今回の研修を通じて、日本の観光振興政策、商工行政による地域経済発展の推進、日本の言語・文化・歴史、さらには先進的な理念を学びたいと考えています。そして、吉林省と鳥取県、さらには中日両国の友好の架け橋となることを目指し、積極的にこの研修プログラムに応募し、参加することを決意しました。

（２）研修の概要

東京での研修

日本に到着した時の期待と興奮は、今でも鮮明に覚えています。初日の対面式では、自己紹介を通じて 5 か国から集まった 10 名の研修生と知り合いました。講師の方々



は簡単なゲームを用いながら、日本の生活・文化・経済発展の状況や注意事項について紹介してくださいました。こうして、この研修生活が本格的にスタートしました。研修期間中、私たちは浅草寺や東京都庁、そして銀座や渋谷などの人気商業エリアを訪れました。

滋賀県 JIAM での研修

5 月 22 日、私たちは滋賀県大津市にある全国市町村国際文化研修所（JIAM）へ向かい、そこで 1 か月間の日本語研修を受けました。わずか 1 か月ではありましたが、毎日がとても充実していました。言語学習だけでなく、生活知識の習得、ホームステイ体験、観光、スポーツなど、さまざまな活動がありました。

日本に来る前、私の日本語レベルは初級でした。しかし、この期間中、良い言語環境に身を置き、日本語を話す機会を得たことで、徐々に日本語への理解が深まり、思いがけない成果を得ることができました。

また、CLAIR 主催の日本の家庭生活体験活動にも参加しました。そこで、優しく温かいご夫婦と 1 日を共に過ごしました。おじさんには畑へ連れて行ってもらい、ご自身で育てた作物を見学させていただきました。おばさんとは一緒に料理を作り、美味しい食事を楽しみました。

さらに、京都市市民防災センタ



一では、地震、台風、洪水、火災などの自然災害への対応方法を学びました。また、茶道教室では日本の茶文化を体験することができました。

研修の最後には発表会が行われ、各国の研修生が自国の歴史、文化、生活様式などを熱心に紹介しました。そのおかげで、私自身も他の国々についてより深く知ることができました。この研修を終えたことで、これからの研修生活がさらに楽しみになりました。

鳥取県での研修

文化・学校交流

7月1日、初めて鳥取県庁を訪れ、新たな研修生活が始まりました。2日には鳥取県国際交流財団で日本語研修を受けました。

7月中は、交流推進課の同僚と共に倉吉市の幼稚園を訪れ、文化交流活動を行いました。子どもたちに中国文化を紹介し、中国の伝統的な遊びを一緒に楽しみました。

7月、交流推進課と共に、海外大学生インターンシップの受け入れ事業に参加しました。この事業は2011年に始まり、訪日観光客の増加に対応するために、鳥取県が海外の大学生を対象に県内でのインターンシップ活動を実施しています。

今年は台湾と香港の7つの大学から23名の大学生が参加しました。彼らは温泉旅館やレストランで「おもてなし」や「接客サービス」の研修を受け、日本の接客マナーを学びました。例えば、お辞儀の角度について、「ご愛顧ありがとうございます」の際は45度、「どうぞよろしくお願いします」の際は30度といった細かなルールや、笑顔の大切さなどを学びました。

さらに、「砂の美術館」を訪れ、砂像アートの魅力を体感しました。今年の展示は第15回目で、テーマは「フランス」。茶園勝彦氏が総合プロデューサーを務め、12か国の20人の砂像アーティストが共同で作品を制作しました。

9月には、長春市外国語高校の交流団を鳥取市の岩美高校と西部高校に案内し、文化交流活動を行いました。内容は、楽器演奏や合唱の披露、浦富海岸や博物館の見学、鳥取花回廊と奥大山ミネラルウォーター工場の訪問、さらには授業体験など、多岐にわたりました。

9月25日には、大阪で開催された中華人民共和国建国75周年祝賀レセプションに参加しました。

11月には国際文化交流イベントに参加し、書道、茶道、故宮の文化クリエイティブ製品などを通じて中国文化を紹介しました。同時に、イベントに参加した他の国々の文化や料理も楽しむことができました。中でも、各国の伝統芸能のパフォーマンスが特に印象に残りました。

12月には、国際交流財団と共に瑞穂小学校を訪れ、文化講座を実施しました。中国の伝統的な衣装や工芸品を紹介し、私は日本語で吉林省と中国の学校生活について説明しました。また、中国の伝統遊び「毽子（けんじ）」の遊び方を実演しました。



2025 年 1 月 22 日には、中国駐大阪総領事館の新年レセプションに参加しました。これら一連の交流活動を通じて、日本語の聞き取りや会話能力が大きく向上したと実感しました。

まんが王国官房での研修

私は漫画にまったく馴染みがないわけではありません。学生時代、よく漫画を読んで余暇を楽しんでいました。しかし、漫画を仕事の対象とし、政府機関の中に専門の部署が設置されていることには、とても興味を持ちました。8 月、この不思議な場所で研修を行いました。

やはり、漫画に関わる仕事は楽しさに満ちていました。研修では、フィギュアや模



型を展示する円形劇場、「名探偵コナン」の町として知られる青山剛昌ふるさと館（コナンファンの聖地）、そして日本の妖怪文化を代表する水木しげる記念館を訪れました。

さらに、「名探偵コナン祭り」にも参加し、有名声優によるトークイベントや、コナン関連グッズの販売会などが開催されていました。まさにコナンファンが一堂に集まる夢のような空間でした。

観光に関する研修

9 月、国際観光課での研修期間中、観光プロモーション Vlog の撮影活動に参加しました。撮影対象は「砂丘の守り人」で、鳥取砂丘の成り立ち、風紋の観察、砂丘の動植物などについて詳しく紹介していただきました。また、砂丘の生態系を守るために、外来植物を取り除くボランティア活動にも参加しました。

さらに、海沿いの道路をドライブしながら倉吉市へ向かい、伝統的な日本建築群「白壁土蔵群」を見学しました。そこで、伝統工芸の「はこた人形」の絵付けを体験し、地元の伝統料理である「豆腐料理」を味わいました。また、廃線となった旧国鉄倉吉線を訪れ、この場所の魅力の一つである美しい竹林を散策しました。

9 月 25 日には、大阪で開催された中華人民共和国建国 75 周年祝賀レセプションに参加し、その際、大阪城を見学しました。天守閣の壮大さは、まさに「百聞は一見に如かず」でした。

10 月には、観光戦略課での研修に参加しました。「第 2 回鳥取砂丘観光関連事業者意見交換会」や「日本観光振興電子データ分析プラットフォーム紹介会」、東京で開



催された「第 84 回中国地方観光情報交換会」などに出席し、観光分野の最新情報について学びました。

また、中部地区の関金でのサイクリング体験にも参加し、山岳地帯を 20km 走行しました。水車体験工房、大山池キャンプ場、宝和菓子工場などを訪れ、清々しい空気を吸いながら美しい景色を満喫し、山間部の涼しさを感じました。そして、美味しい食事を堪能し、最高のサイクリング体験となりました。

これらの活動を通じて、鳥取の海、砂丘、ジオパーク、観光名所についてより深く理解することができました。また、鳥取県が観光戦略として、地域の自然・文化・食などの魅力を観光資源として活用し、旅行者の体験価値を向上させる独自の取り組みを行っていることを学びました。

販路拡大・輸出促進課での研修

12 月、商工労働部市場開拓局販路拡大・輸出促進課での研修に参加しました。鳥取県の特徴ある産業について学び、鳥取和牛の子牛競り市、梨の栽培と販売、海産物・農産物市場、酒造、特色あるレストラン、伝統工芸品など、さまざまな分野を視察しました。

東郷の梨園を訪れた際、整然と並ぶ梨の木に驚きました。主幹はつながっており、側枝が両側に広がり、梨の実がちょうど作業員の手の届く高さで育つようになっています。また、外周には防護ネットが設置され、雹や害虫から守られています。栽培から包装まで、鳥取県では厳格な品質管理体制が確立されていました。



民芸館、ams、たくみ工芸店、Sora などの工芸品専門店を訪れ、陶器、木工品、和紙、染物など、多彩な手工芸品を鑑賞しました。また、農水産市場も見学し、季節の特産品が豊富に揃っていました。梨、リンゴ、ミカン、カニ、イカ、魚、餅、米菓など、種類の多さに圧倒されました。地元の有名な酒造「中川酒造株式会社」を訪れ、国際的な賞を受賞した日本酒「強力（ごうりき）」を試飲しました。さらに、大江ノ郷やたくみといった特色あるレストランで、パンケーキやカニ定食を堪能しました。また、「bonne nono」の店主から、伝説的な創業ストーリーを伺いました。彼女の焼いたガレット・デ・ロワ（国王のケーキ）は、日本全国で2度も第一位を獲得したそうです。そのケーキや梨のタルト、アップルパイ、イギリス紅茶も試食させていただき、その味に感動しました。

この研修を通じて、鳥取県が地元の中小企業支援のために打ち出している政策について学びました。例えば、低金利融資や補助金の提供、特色産業の積極的な PR、システム的な波及効果の促進などが挙げられます。また、企業のイノベーションを

奨励し、国際見本市への参加を通じて競争力を高める施策についても理解を深めました。

通商物流課での研修

2025年2月からは通商物流課での研修が始まりました。2月7日の午前中、米子市で開催された「未来産業大会」に参加しました。会場では、スマートウェア、ロボット犬、ドローン、水中カメラ、障害物回避型飛行カメラ、新エネルギー車など、最先端の技術製品が展示されていました。中でも、水素発電関連の製品に強く興味を持ちました。また、トランスフォーマーのように変形する車の迫力あるパフォーマンスも観覧しました。午後には境港ビジネスセンターで開催された交流会に出席し、鳥取と吉林の商業貿易活動について意見交換を行いました。非常に有益な情報を得ることができました。



2月12日には、海外展開支援機関実務者ネットワーク会議に参加し、各部門が最近の重点国際ビジネスについて説明し、意見を交換しました。

2月26日には、米子で香港、台湾の経済概況について講座参加しました。日本と中国のビジネスについて学びました。

(3) 交流活動、文化体験など

8月、鳥取の伝統的な祭り「第60回鳥取しゃんしゃん祭」にも参加しました。祭りに向けて、鳥取の伝統舞踊である「鳥取傘踊り」を習い、何日も練習を重ねました。最初はまったくついていけませんでしたでしたが、最終的にはしっかりと踊れるようになり、商店街の中心で踊るという貴重な経験をしました。

祭りの夜、市民が一斉に街へ繰り出し、私たちの踊りを見ながら冷たい飲み物を差し入れてくれました。活気に満ちた夏の夜の雰囲気にすっかり魅了されました。



(4) 総括と帰国後展望

今回の鳥取県での研修を通じて、私は日本の行政管理、産業振興、観光分野における先進的な経験を学ぶことができました。それと同時に、日本人の職人精神やサービス意識の高さを深く実感しました。特に、鳥取県が地域の自然、歴史、文化資源を活かしながら経済発展を推進する手法は、吉林省の今後の発展にとって非常に参考になると感じました。また、観光名所やイベントを通じて、地方自治体が文化作品を活用

し、地域文化のブランド化を図ることで、観光産業の発展を促進していることを強く実感しました。

研修を終えて帰国後は、日本の経済・社会発展の先進的な理念や経験を吉林省の産業発展に生かしていきたいと考えています。この研修を通じた友好交流により、相互理解を深め、友情を育み、文化交流を通じて新たな視点を得ることができました。今後も、吉林と鳥取、さらには日中両国の友好関係の維持者、交流の促進者、協力の推進者として尽力し、日中の世代を超えた友好関係の発展に積極的に貢献していきたいと思っています。

「 マレーシアコタバル市との職員相互派遣について 」

自治体名	岡山県笠岡市
研修員名	ワン イスム サイフラ ビン ワン アドナン
出身国	マレーシア
研修分野	一般行政
研修期間	6 か月
主な研修先	笠岡市協働のまちづくり課

1 背景・目的

笠岡市は1999年からマレーシア・コタバル市と友好握手都市を締結し、民間企業の交流やコタバル市への親善訪問、近年ではスポーツを通じた交流や学生交流、行政職員の相互派遣などを行っている。

コタバル市との各種交流事業を通じて国際交流に参加する市民を増やし、市民の国際意識を醸成するとともに、国際交流事業を通じて異文化に触れることで、異なる価値観を理解し、外国人と共存できる多文化共生のまちづくりの推進を目指している。

今後も民間交流の支援及び行政同士の関係強化によって交流を継続できるよう、本事業では両市のパイプ役となる人材の育成と、交流による市民の多文化共生意識の向上を期待している。

2 研修の概要

(1) 一般行政分野

- ・ 財政研修（日本の税金の種類、笠岡市の税収、笠岡市の財政状況など）
- ・ ゴミ収集～最終処分までのフロー及びゴミの分別に関する啓発について
- ・ 国際交流事業（英会話講座への参加、市内に住む外国人との交流など）
- ・ 公園の維持管理及び公営住宅の管理について
- ・ 危機管理体制について（災害時の対応や防災啓発活動） など

(2) 教育分野

- ・ 中学校における英語授業参加（プレゼンテーション、伝統菓子作りなど）
- ・ 高等学校における多文化共生をテーマとした地域課題探求授業での講座
- ・ 高等学校におけるマレーシアの高校との姉妹校締結の支援 など

(3) その他

- ・ ユネスコ無形文化遺産「白石踊」の取材及びプロモーション動画の作成
- ・ 駅前デジタルサイネージの外国人向けコンテンツの作成
- ・ 笠岡市観光パンフレット（英語版）の作成 など



環境課実地研修



学校でのプレゼンテーション

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

今回の研修員は事務職であったことから、庁内を横断的に回り一般行政を幅広く学んでもらう研修を実施した。15の課及び関係組織8つ（観光協会、警察、消防等）、市内学校6校で研修を行い、さらに広報誌にて研修員の記事を半年間連載することで、研修の充実化だけでなくより多くの職員や市民に研修員を知ってもらう機会をつくることができ、延いては友好握手都市コタバル市との交流周知にも繋げることができた。

苦労した点としては、研修員は基本的には英語でしか会話ができなかったため、研修時はもちろん、日々の困りごとやストレスの把握のためにも英語でのコミュニケーションが必須だったが、充分に対応できる職員が担当課におらず研修日程の調整やヒアリングによる精神面のケアに時間を要した。

また、研修員はイスラム教徒であったことから、島しょ部や市外での研修時にはハラルの食事や礼拝場所の手配、礼拝時間に合わせたタイムスケジュール管理など配慮すべきことが多く初めは苦労したが、結果的に職員や関係者の異文化理解を深める機会となった。

4 成果・課題

各分野での研修でコタバル市へフィードバックできる仕組みを学んだだけでなく、自国の仕組みの説明や笠岡市への提案も積極的に行っており、本市職員にとっても知見を広げる貴重な機会となった。

また、学生との交流においては、英語でのコミュニケーションやホームタウンの紹介だけでなく、本市在住外国人でイスラム教徒が増加している背景から、イスラム教の規律や日本で生活する上で困っていることについての意見交換、実際のお祈りの見学なども行い、国際感覚と多文化共生意識の醸成に寄与した。

今回は庁内外を横断的に研修を行い観光協会や学校等多くの組織と交流を行ったことから、今後は両市のパイプ役として行政、民間、教育と幅広い分野での交流深化に貢献してくれることを期待したい。

「 Wonderful Journey in Kasaoka city 」

氏 名

ワン イスム サイフラ ビン ワン アドナン

(Name)

出身 国

マレーシア

(Country)

受入自治体

岡山県 笠岡市

(Host Institution)

研修 先

笠岡市政策部協働のまちづくり課

(Training Facility)



1 本事業に応募した動機

(Reasons for applying for this program)

First of all, Local Government Officials Training Program (LGOTP) offers an invaluable opportunity to gain firsthand experience in the workings of Japanese local government that is Kasaoka city. I aimed to enhance my knowledge and skills in public administration and governance, which applicable to my role back home.

Furthermore, I want to deepen my understanding of Japanese culture, traditions and social community that could be an inspiration as cultural exchange initiatives.

Finally, Kasaoka city and Kota Bharu city already been 25 years of handshaking friendship city. Hence, its great opportunity to strengthen and provide good relationship between both cities.

2 研修の概要

(Summary of Training)

(何を学び、何を身に付けたかを含む。)

I arrived in Tokyo on May 26, 2024, to participate in the Local Government Officials Training Program (LGOTP). The opening ceremony, organized by CLAIR, was held on May 27, followed by a basic Japanese test

to assess our language proficiency. During the initial days, we visited the Tokyo Metropolitan Government and Asakusa Sensoji Temple. Subsequently, I moved to the Japan Intercultural Academy of Municipalities (JIAM) in Shiga Prefecture for a month-long program focusing on Japanese language and culture. The training included a variety of activities such as a tea ceremony, sessions on local autonomy and government finance, a Shiga study tour with a homestay experience, a visit to the Kyoto Disaster Prevention Centre, and presentations at Karasaki Junior High School and JIAM. After completing the program in Shiga, I proceeded to Kasaoka City to begin practical training in local governance and administration.

a. Training

i. Local Governance Training

During my Local Governance Training in Kasaoka City, I gained hands-on experience in public administration by participating in city budgeting processes, disaster management briefings, and policy discussions. I observed initiatives like green mobility for the elderly and collaborated with city officials on addressing community challenges, including improving services for foreign residents. This training provided a comprehensive understanding of Kasaoka's administrative practices and strategies for efficient local governance.

ii. Garbage management

Garbage in Kasaoka is categorized into three types: burnable garbage, non-burnable garbage, and recyclable garbage. Every year, Kasaoka city distributes plastic bags for burnable garbage (red writing), plastic bags for non-burnable garbage (blue writing). If the plastic bag runs out in less than a year, residents can buy a piece of plastic for ¥ 100. This initiative aims to encourage residents to separate recyclable garbage. Burnable waste is collected and sent to an incineration plant and then processed at high temperatures to reduce its volume because the waste has turned into ash. The processed waste is taken to a landfill. Only ash and small waste that cannot be burned are disposed of here. This makes the landfill odor-free and produces minimal gas.



Garbage collection



Garbage ash landfill

iii. Culture and Tourism

During my culture and tourism training in Kasaoka City, I participated in promoting local attractions through video production for events like the Shira Ishi Odori and Kasaoka fireworks. I engaged in cultural festivals, supported international exchange programs, and collaborated on showcasing traditional crafts like Bizen Yaki, Okayama Castle. This training enhanced my understanding of Kasaoka's rich cultural heritage and its efforts to boost tourism.



Shiraishi odori



Bizen Yaki, Okayama castle

iv. Education initiatives

As part of my training in Kasaoka City, I contributed to education initiatives by engaging with local schools through presentations, facilitating cultural exchanges, and supporting programs that connected students with international perspectives. I visited institutions like Niiyoshi Junior High School and Oshima Junior High School, sharing insights about my culture and experiences. Additionally, I collaborated with the city on promoting sister school programs (Kasaoka Shogyo and SMK Dato Ahmad Maher), exchange program, and encouraging meaningful learning

experiences for students.



Niiyoshi Junior High School



Oshima Junior High School

3 きこくご てんぼう 帰国後の展望

(Plans upon returning to your home country)

(ほんじぎょうでえせいか きこくごのように活かしたいか)

(How would you apply what you have learnt on the program?)

Upon returning to my home country, I plan to apply the knowledge and skills gained during my training in Kasaoka City to enhance local governance, promote cultural exchange, and support community development. I aim to improve public services, disaster management, and inclusivity in my community. Inspired by Kasaoka's tourism and cultural initiatives, I will work on preserving and promoting local heritage while fostering international collaboration through education and exchange programs. My experience has equipped me to contribute effectively to governance, cultural enrichment, and community resilience in my home country.

Lastly, I would like to thank all Kasaoka city staff for the wonderful journey experience and knowledge.

「 笠岡市での素晴らしい旅 」

氏 名

ワン イスム サイフラ ビン ワン アドナン

(Name)

出身国

マレーシア

(Country)

受入自治体

岡山県 笠岡市

(Host Institution)

研修先

笠岡市政策部協働のまちづくり課

(Training Facility)



1 本事業に応募した動機

まず初めに、自治体職員協力交流事業（LGOTP）は、笠岡市における日本の地方行政の実務を直接体験できる非常に貴重な機会です。私は、この研修を通じて公共行政およびガバナンスに関する知識と実務能力を向上させ、自国での業務に活かすことを目的としました。

さらに、日本の文化や伝統、地域社会に対する理解を深めることで、今後の文化交流事業の参考や刺激になることを期待しました。

最後に、笠岡市とコタバル市は、すでに 25 年間にわたる友好都市関係を築いています。このような長年の交流を背景に、両市の友好関係をさらに強化し、良好な関係の維持・発展に貢献できる絶好の機会であると考え、本プログラムに参加いたしました。

2 研修の概要

私は 2024 年 5 月 26 日に東京に到着し、「地方自治体職員研修プログラム（LGOTP）」に参加いたしました。翌 27 日には、一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）主催による開講式が行われ、日本語能力を確認するための簡易的な日本語テストも実施されました。

研修初期には、東京都庁の視察や浅草・浅草寺の見学を行い、その後、滋賀県にある「全国市町村国際文化研修所（JIAM）」へ移動し、約 1 か月間、日本語および日本文化に関する研修を受けました。

この JIAM での研修では、茶道体験、地方自治制度や地方財政に関する講義、滋賀県内のスタディツアー（ホームステイ含む）、京都市防災センターの見学、さらには唐崎中学校および JIAM 内でのプレゼンテーションなど、多岐にわたる活動が実施されました。

滋賀での研修を終えた後は、岡山県笠岡市へ移動し、地方自治および行政に関する実務研修を行いました。

実務研修

i. 受入自治体での研修

笠岡市での地方自治に関する実務研修では、実際の行政運営に携わる機会をいただきました。市の予算編成プロセス、防災に関する説明会、政策に関する意見交換などに参加し、現場の行政実務を学びました。

また、高齢者向けのグリーンモビリティ施策の視察や、外国人住民に対する行政サービスの改善に関する協議にも加わり、地域課題の解決に向けた取り組みを実地で体験しました。

この研修を通じて、笠岡市における効率的かつ実践的な行政運営の方法や地域密着型の施策について、幅広く理解を深めることができました。

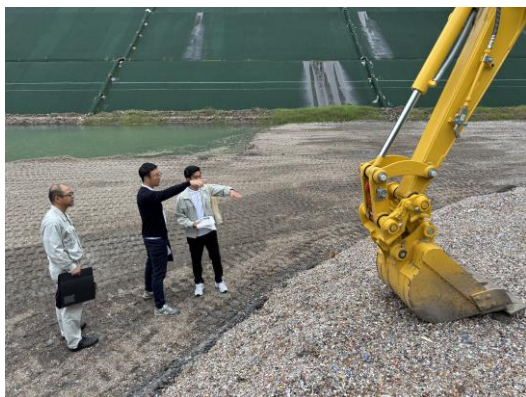
ii. ごみ処理について

笠岡市では、ごみは大きく **3** つに分類されています。「燃やせるごみ」「燃やせないごみ」「リサイクルごみ」です。市では毎年、「燃やせるごみ用」（赤文字）および「燃やせないごみ用」（青文字）の指定ごみ袋を各家庭に配布しています。

1 年以内に袋が足りなくなった場合は、**1** 枚 **100** 円で追加購入が可能です。この制度は、住民にリサイクルの意識を促し、分別の徹底を図ることを目的としています。

回収された「燃やせるごみ」は、焼却場に送られ、高温で焼却処理されることで体積が大幅に減少し、灰になります。この処理済みの灰および焼却できない細かいごみだけが埋立地に運ばれます。

その結果、埋立地には臭いが発生せず、有害ガスの排出も最小限に抑えられており、非常に効率的かつ環境に配慮したごみ処理システムが運用されていることを学びました。



ごみ収集



ごみ焼却灰埋立地

i. 文化・観光に関する研修

笠岡市での文化・観光に関する研修では、「白石踊り」や「笠岡花火大会」などのイベントに向けた **PR** 動画の制作を通じて、地域の観光資源の魅力発信に携わりました。

また、地域の文化祭への参加や、国際交流プログラムの支援活動にも関わり、備前焼や岡山城などの伝統工芸・歴史資産の紹介にも協力しました。

これらの活動を通じて、笠岡市が有する豊かな文化的遺産と、それを観光振興につなげようとする取り組みについて、より深い理解を得ることができました。



白石島 盆踊り（白石踊）



岡山城での備前焼体験

i. 教育に関する取り組み

笠岡市での研修の一環として、私は市内の教育分野に関わる活動にも参加しました。地元の中学校でのプレゼンテーションや文化交流を通じて、生徒たちが国際的な視野を広げられるよう支援を行いました。

具体的には、新吉中学校や大島中学校を訪問し、自国の文化や自身の体験について紹介しました。これにより、生徒たちが異文化に触れる貴重な機会となりました。

また、笠岡商業高校とマレーシアの **SMK Dato Ahmad Maher** 校との姉妹校交流の推進や、その他の国際交流プログラムにも市と連携して取り組み、生徒たちにとって有意義な学びの場を提供するための活動を支援しました。

このような経験を通じて、教育を通じた国際理解の促進と、若い世代への多文化教育の重要性を改めて実感することができました。



新吉中学校



大島中学校

3 帰国後の展望

帰国後は、笠岡市での研修を通じて得た知識や経験を活かし、地域のガバナンスの向上、文化交流の推進、そして地域社会の発展に貢献していきたいと考えております。特に、公共サービスの改善、防災対策の強化、多様性と包摂性のある社会づくりに力を注ぐ所存です。

また、笠岡市の観光・文化振興に関する取り組みに大いに刺激を受け、自国においても地域の文化遺産の保護・発信に努め、教育や交流プログラムを通じた国際連携の促進にも取り組んでいきたいと考えています。

今回の研修は、行政、文化、そして地域の強靱性における貢献の可能性を私に示してくれた、非常に有意義な経験となりました。

最後になりますが、この貴重な経験と学びの機会を提供してくださった笠岡市のすべての職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

「 ニルカント市職員を受け入れて 」

自治体名	高知県梼原町	
研修員名	① スニール・ビーアンダリ	② スジャン・アドイカリ
出身国	ネパール	ネパール
研修分野	行政全般	行政全般
研修期間	10 か月（来日時点からの月数）	10 か月（来日時点からの月数）
主な研修先	まちづくり産業推進課	まちづくり産業推進課

1 背景・目的

高知大学より、ネパールでの「蛇籠」技術の普及事業を実施することに対し、本町へ協力の打診があり、その後、JICA の「草の根事業」として事業採択された。

平成29年3月から令和2年2月の期間、役場関係者を始め、町内土木事業者が継続的にネパール国ニルカント市を訪問し、技術提供を行ってきた。

草の根事業を通して、双方関係者が往来する中、ニルカント市と本町との間で交流事業に取り組む機運が高まり、令和2年1月に交流事業の実施について、双方の合意を取り交わした。

梼原町とネパール国ニルカント市との間で、土木技術の普及事業を通して培ったつながりを継続し、本町の様々なノウハウをニルカント市へ提供するとともに、関係人口創出による町民の国際感覚の習熟の機会づくりや外国人の受入れ体制の構築など、人材交流による双方の発展を目的としている。

2 研修の概要

主な研修内容としては、日本語の研修と各種行事への参加となった。行事への参加については、様々な分野での住民の集まりに参加し、ネパールの紹介や自分たちの文化などを発表していただき、住民の方との交流を通して、日本の文化を学んだり、住民の方への国際意識の醸成を行った。



(8/15 高原まつりでの役場よさこいチームによる、よさこい正調踊りの様子)



(12/20 地域の集まりでの住民の方との交流の様子)

3 研修実施にあたって工夫、苦勞したこと

日本語でのコミュニケーションが難しかったので、翻訳アプリを活用しながら会話をを行った。研修生は英語を話すことはできたが、受入担当は英会話ができなかったため、高度な行政事務を研修することができなかった。

4 成果・課題

役場職員を始め、地域住民との交流により、町内での一定の国際理解の醸成につながったと感じる。最初はコミュニケーションが難しいからと敬遠していた方も、ジェスチャーや翻訳アプリを活用することで意思を伝えることができるかと分かったと、日本とネパールの文化の違いなどに積極的に質問をするようになり、意識が変わったと感じた。

研修生としては、ごみの分別やオフィスルールなど、日本人が当たり前と感じる文化に当初は慣れなかったが、滞在期間中を通して徐々に慣れていき、帰国した際には、オフィスのメンバーに伝えていきたいとの意見をうかがえた。

課題としては、日本語でのコミュニケーションが流暢にできなかったことである。当初、協定内の約束として、日本語能力試験「N4 レベル」相当の日本語能力を有することを条件としていたが、日本語での読み・書き・聞くが全くできない状況だったので、急遽、オンライン日本語レッスンを導入することとした。それにより、高度な行政事務（財政など）を研修することができなかった。

今後の展望としては、今回の受け入れを通して感じた中長期での研修生受け入れの困難さなどを考慮しながら、ニルカント市とこれからの相互協力の体制を検討していく。

「日本に来て学んだこと」

氏名

スジャン・アドイカリ

(Name)

出身国

ネパール国

(Country)

受入自治体

高知県梼原町

(Host Institution)

研修先

梼原町役場まちづくり産業推進課

(Training Facility)



1 本事業に応募した動機

私は、市役所での仕事として、婚姻届や死亡届、出生届の受付、市民権の写しの交付、海外手続きのための英語翻訳などを行っています。

ニルカント市は、地元の方々にサービスを提供していますが、個人的に自治体の公共サービスの提供にギャップを感じています。本は、職場においておもてなしの文化が進んでいます。なので、公共事業に関する日本の労働文化を学びたいです。特に、公共の場での対応やコミュニケーション、接客、事務処理、事務管理のスキルなどを学びたいと思っています。

私は、日本の行政の労働文化を学び、母国に戻った後、ニルカント市の人々に自分の経験を共有したいと思っています。

2 研修の概要

○主な研修スケジュール

日程	内容
5月26日～5月28日	東京研修
5月29日～6月27日	JIAM 研修
7月26日	高校生インターンシップ対応
8月15日	高原まつり参加
10月5日	グルメまつりスタッフ対応
11月5日	県内一斉防災訓練参加
12月4日	人権擁護委員とのこども園訪問
12月20日	介護予防教室での住民交流

私が日本に来て最初に学んだのは、津波、地震、台風などの自然災害から生き延びる方法でした。地震が起きたら、まず机の下で体を守ります。ネパールでは、過去に大きな地震があり、建物や工作物が崩れました。そのようにときに、自分の体を守るための方法を学ぶことができました。



JIAM での地震体験



梶原町での避難訓練

事務所での仕事について、同じ場所に座って部署の職員と一緒に仕事をするなど、役場職員の働き方について多くのことを学びました。ネパールでは、職員が個室で仕事をしているからです。仕事の内容について、チームで解決していくための職場環境のあり方、特にコミュニケーションがしやすい環境は、大きな違いを感じました。

また、職員の方々は、時間を考慮しながら非常に慎重に作業しています。出勤時間や休憩、退勤時間はもちろんのこと、アポイントメントの時間には、10分前には現地へ到着しているなど、日本に来て1分でも大切だと実感しました。



よさこい役場チームの集合写真



高原まつりで使用するテントの準備

3 ^{きこくご}帰国後の^{てんぼう}展望

- ① 廃棄物管理をより優先し、ニルカンタの住民に、種類ごとのごみに分ける必要があることを適切に説明し指導します。
- ② ニルカンタ市役所で、従業員全員と一緒に座って仕事について話し合うなど、働きやすい環境作りや仕事のやり方を変えたいと思っています。
- ③ 自分の仕事に責任を持って、最後までやり遂げる意思を持ちます。
- ④ 私の自治体で何らかのお祭りがあるときは、役場職員が協力し合い、お互いにサポートし合う環境をつくっていきます。
- ⑤ 何かやりたいことがあれば、1日でどれだけできるか計画を立てます。
- ⑥ 私はニルカンタ市の住民を集め、日本で暮らしている間に私が見たもの、学んだこと、取り組んだことを伝え、みんなで改善する方法を考えます。

「 梶原で学んだこと 」

氏 名

スニール・ビーアンダリ

(Name)

出身国

ネパール国

(Country)

受入自治体

高知県梶原町

(Host Institution)

研修先

梶原町役場まちづくり産業推進課

(Training Facility)



1 本事業に応募した動機

私の仕事は、屋外で啓発プログラムを作って、人々に伝わりやすい情報を発信できるようにしています。また、事務所に来る外国人ゲストに、ニルカシタ市の経済、社会、宗教などについて説明しています。

日本は、行政サービスの提供や職場での接遇の教養が進んでいると聞いたので、職場での技術を高めたいと思いました。

さらに、日本の職場での勤務態度を学び、ネパールに戻った後は、すばやく丁寧に働くことができるようになりたいと思いました。

2 研修の概要

○主な研修スケジュール

日程	内容
5月26日～5月28日	東京研修
5月29日～6月27日	JIAM 研修
7月26日	高校生インターンシップ対応
8月15日	高原まつり参加
10月5日	グルメまつりスタッフ対応
11月5日	県内一斉防災訓練参加
12月4日	人権擁護委員とのこども園訪問
12月20日	介護予防教室での住民交流
1月21日	防災備蓄倉庫での防災研修

3月20日	研修報告会
3月27日	帰国

研修期間中、文化伝統のさまざまなプログラムやダンスに参加しました。特に、8月15日に開催された栲原町のお祭りである「高原まつり」では、役場職員のチームに参加し、町中心部の道路にてよさこい踊りを踊りました。また、11月に行われる「津野山神楽」を鑑賞し、日本独自の文化に触れ、私は栲原の文化的伝統がとても気に入りました。



津野山神楽を鑑賞



役場チームでよさこいを踊る

廃棄物管理に関する知識を得ました。

日本の廃棄物の管理はしっかりしています。さまざまな空き缶やガラスビン、プラスチック製品がさまざまな方法で管理されています。分別する際にも、それぞれ専用の袋を購入し、ニルカント市では、廃棄物を捨てる際に、生ごみとそれ以外の廃棄物の2種類でしか分別していません。グルメまつりでも、「エコステーション」という廃棄物を収集する区画を設置し、来場したお客さんの負担を減らす工夫をしていました。おもてなしの対応が素晴らしいと思いました。



グルメまつりでのスタッフ対応

3 きこくごてんぼう 帰国後の展望

梶原の気候、天気、山の環境はネパールに似ています。人々は自然豊かな地域と感情豊かな場所を好んでいました。梶原で学んだことで、このようなことにチャレンジします。

1. 適切な廃棄物管理
2. 児童発達と教育事業の推進
3. 時間の使い方（スケジュール管理や厳格なタイムマネジメント）
4. 組織として1フロアで協力して業務を遂行すること
（ネパールでは、それぞれの職員が個室で働きます。）
5. 法令などの遵守

自治体事業報告書

「 令和 6 年度湖北省からの研修員受入について 」

自治体名	大分県
研修員名	程 蒙
出身国	中国
研修分野	行政事務・国際交流
研修期間	6 か月
主な研修先	大分県企画振興部国際政策課、三金商事株式会社

1 背景・目的

大分県は、海外戦略を策定し、県産業の活性化や、グローバル人材の育成を図っている。中国との交流においては、特に湖北省との関係強化を目指しており、平成 25 年度から一般財団法人自治体国際化協会の L G O T P を活用し、中国湖北省の自治体職員の研修員を受け入れてきた。研修経験者との人的ネットワークを構築し、両省県間の貿易・観光・文化交流の架け橋としたい。

2 研修の概要

J I A M で 4 週間の日本語研修を受け、来県後は国際政策課を中心に研修を行った。留学生向けのスタディツアーで、大分県内企業の視察や中国への情報発信のため県内観光地の視察などを行った。

8 月末からは、本県で中国等を相手としたライブコマースでの商品販売等や、商品企画・開発・卸販売を行う企業である三金商事株式会社にて 9 週間の研修を行った。実地研修を通じ、貿易、マーケティング、経営等を学んだ。



スタディツアーにて
大分県のホーバークラフトを見学



帰国前最終出勤日あいさつ

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

大分県滞在中は、留学生向けのツアー参加など、より多くの人と交流が図れるよう調整した。県内の観光地を案内するなど、大分県に対する理解が深まるよう努めた。また、国

際交流員が参加する業務やイベントに同行してもらい、できるだけ有意義な研修内容となるように尽力した。貿易、マーケティング、経営等を実地で学ぶため、インバウンド向け旅行会社の三金商事株式会社での研修を行った。日本語の学習についても、国際交流員をはじめ、国際政策課員によるサポートを行った。

苦勞した点について、コロナ禍以降、研修員の受入れを再開して間もないこともあり、住宅の選定や、保険料に関する手続き、転入及び転出の手続きなど、不慣れな対応に時間を要した。また、研修先の受入れ企業の選定においては、これまで受入れを行っていた企業が県外へ移転したことや、業務多忙を理由に受入れが困難であるとの連絡を受けるなど、調整に多大な労力を要した。

3 成果・課題

成果として、中国湖北省での人脈形成や相互理解の深化が期待される。これまでに湖北省から9名の研修員を受入れ、各地域政府に人的なつながりが構築されたことで、今後の多方面にわたる経済・文化交流の足がかりができています。コロナ禍により一時中断した受入れであったが、昨年度より再開し、湖北省と大分県との人的交流の懸け橋となる研修生の受入れができた。今後の大分県と湖北省とのつながりの中で帰国後も随時連絡を取り、交流を継続できる体制が確立できた。

課題として、湖北省から大分県への研修員派遣は継続的に実施されているものの、大分県から湖北省への派遣や出張は長期間実施されておらず、相互交流の均衡が保たれているか、機能しているかということについて懸念がある。また、研修員受入れに伴う住宅選定や転入・転出手続きなどの業務負担が大きく、現在の研修員受入事業が最適な交流形態であるかについては検討の余地がある。

きょうりよくこうりゅうけんしゅういんけんしゅうほうこくしよ
協 力 交 流 研 修 員 研 修 報 告 書

日本の経済発展の経験を学び、両国の経済および文化交流を促進する

氏 名 テイ モウ
程 蒙

出身国 中華人民共和国

受入自治体 大分県



研修先 大分県庁国際政策課

1 本事業に応募した動機

私は湖北省黄石市財政局の職員であり、今回の研修に参加する目的は、日本が推進している経済発展の先進的な経験を学び、黄石市の経済改革と発展に役立てることです。黄石市はかつて、豊富な鉄鋼および鉱産資源を活用し、GDPで省内上位3位に位置していました。しかし、現在では伝統的な産業の転換が急務となっており、ハイテク産業の発展が遅れているため、経済の発展には大きな課題が立ちまわっています。その一方で、大分県は産業のアップグレードや経済の弾力性の向上において豊富な経験を有しており、その新たな取り組みを学ぶことは、黄石市の経済発展に向けた意思決定に有益な参考となると考えています。また、2024年は大分県と武漢市が友好都市として提携して45周年を迎える年でもあり、私は交流員としてその責任を果たし、両市間の民間交流と協力を強化し、文化交流の架け橋を築くことを目指しています。

2 研修の概要

全体日程について、5月26日から5月28日まで東京で集合し、5月29日から6月27日まで滋賀県の語学学校で日本語を学び、6月28日から8月25日まで大分県庁で国際政策研究を行い、8月26日から11月4日まで大分県三金商事株式会社で研修を受け、11月5日から11月25日まで再び大分県庁の国際政策科で研修を行い、帰国まで続けます。

東京で、正式な研修の旅が始まりました。日本での研修の第一歩は東京で、到着したとたん、旅の疲れを忘れ、頭の中には新しさと好奇心だけが広がって

いました。すべてが「新しい」という言葉で表現できるものでした。まず一つ目は、新しい情報。スタッフの皆さんが非常に温かく歓迎してくださり、研修の具体的な日程について詳細に説明していただきました。また、大分から迎えに来た嵯峨さんからも多くの情報をいただき、大分県庁での宿泊、食事補助、仕事の配置について基本的な理解を得ることができました。次は、新しい友達。五か国から 11 名の研修生が東京に集まり、最初は自己紹介や日本語テストがあり、その後一緒に東京を観光しました。異なる文化、言語、習慣が交わり、さまざまな面白い火花が生まれました。そして、新しい文化体験。滋賀に向かう出発前日に、私たちは東京の市役所と日本の伝統文化の代表格である浅草寺を訪れる機会を得ました。これにより、東京という都市の伝統と現代性が融合した魅力を初めて感じることができました。



東京都庁見学

滋賀県に行って、JIAM（全国市町村国際文化研修所）で、集中的な日本語学習を行いました。東京での旅のように、内容がぎっしり詰まっていて充実した一ヶ月でした。日本語のレベルが上がり、日本の文化を体験し、日本の生活にも慣れました。まず、教室での学習スケジュールがとてもきつかったです。毎週 35 時間の授業があり、毎週金曜日にはテストがありました。月末には修了式があるので、日本語はとても早く上達しました。次に、日本の政治制度、教育制度、災害への対策などの基本的な知識を学びました。たとえば、地元の財政に関する授業を受けたり、京都防災センターや唐崎中学校を見学したりしました。さらに、抹茶のお茶会を体験したり、日本の扇の文化を学んだり、商人街博物館を訪れたり、日本の家庭で一日を過ごすなど、色々な文化体験をしまし

た。特に印象に残ったのは、修了式で私が日本語で自己紹介をし、クラスメートと一緒にスキットを演じたことです。最後に、先生方やスタッフの皆さんの拍手の中で修了証を受け取った時は、とても感動しました。一ヶ月は短い期間でしたが、とても充実していました。



奈良公園



修了証書授与

大分県庁の国際政策課での研修期間中、私は 11 人の同僚に中国の伝統的な掛け飾りと黄石の伝統的な美食「黄石港餅」をお土産として持って行きました。私の主な仕事は、中国側代表の来訪時の接待や中国文化と中国語の交流・普及活動でした。大分と中国の武漢との交流会議に参加し、大分日中友好協会や別府友好協会と連携を取りました。また、大分大学と別府大学の留学生と一緒に、スタディツアーに参加し、巨大なホーバークラフトに乗り、ホーバーターミナルを楽しみました。さらに、学校の招待を受けて、他の 2 人の国際交流員と玖珠町立小田小学校を訪れ、中国を紹介したり、梅干し作りを体験したりしました。仕事の合間には、大分の文化や風土を存分に楽しみました。大分は静かで美しい場所で、人々はとても親切です。自然の風景は素晴らしく、人文活動も多彩です。私は、宮崎駿監督のアニメにあるような景色を楽しめる由布院や温泉で有名な別府を訪れ、大分七夕祭りに参加し、伝統的な神道のパフォーマンスを鑑賞しました。また、高崎山自然動物園でかわいい子猿を見たり、大分県立美術館 OPAM で絵画鑑賞したり、iichiko 総合文化センターで伝統的な歌謡曲を聴いたりしました。豊かで楽しく、穏やかな日常生活のリズムを深く感じました。

「楽しい人たちと一緒にいると、すべてがもっと楽しくなる」という言葉通り、一番楽しかったのは、同僚たちと一緒に食材を買って車で別府へ行き、地獄釜で食材を蒸して食べたことです。食後は近くの無料足湯で足を温め、その後はショッピングモールでクレーンゲームを楽しみました。私の課長や同僚たちはみんなとても優しく、たくさん助けて、配慮をしてくれたので、とても温かく感じました。国際政策課での仕事を通じて、日本文化の独特な魅力を深く

知ることができました。

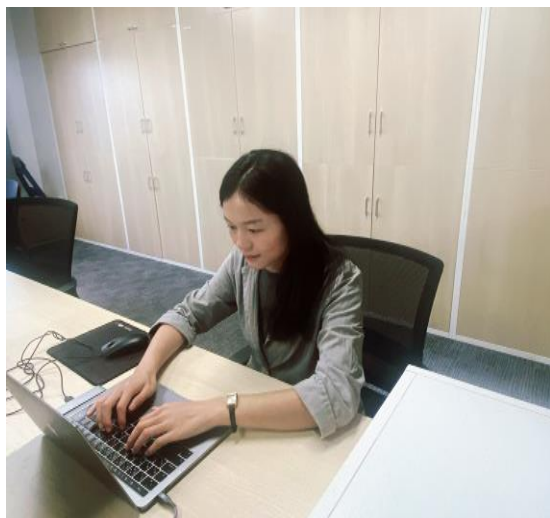


春日神社



高崎山動物園

三金商事株式会社では、2013年に中国人夫婦によって設立された小売業の会社で、現在は事業を拡大し、ライブコマースやTemuプラットフォームでのオンライン販売に取り組んでいます。ちょうど企業が急成長している段階で、私の主な仕事は、Temuでの商品情報登録をサポートし、商品の売買状況を調査することでした。研修の11週間の間は、ちょうどこの会社が日本のTemuショッピングプラットフォームで店舗を開設する試みを始めた時期でした。私は、日本企業の日常業務に参加し、企業の運営方法や企業文化を理解する貴重な機会を得ました。また、日本企業についての理解を深めるため、会社のオーナーである李さんへの個別インタビューを行い、大分県庁に手紙を書き、大分大学の博士や日中友好協会と交流しました。それにより、日本がどのように強力な中小企業支援システムを構築しているのかを調査しました。この間、関連の調査報告書も作成しました。



三金商事株式会社で働く



同僚との食事会

3 帰国後の展望

帰国後、私は日本が中小企業の発展を促進するための経験と取り組みを、私の勤務先に正確に伝える予定です。これが政府の意思決定に役立つことを期待しています。また、日本での研修期間中の学びと経験を共有し、引き続き日本語の勉強を続けていきます。さらに、武漢と大分の友好都市交流を促進し、経済や文化の面でより多くの協力と交流が実現できるよう、努力していきたいと考えています。

「 姉妹都市韓国慶州市との職員交流 」

自治体名	大分県宇佐市
研修員名	金柿儼（キムシヒョン）
出身国	大韓民国
研修分野	一般行政
研修期間	6 か月
主な研修先	宇佐市秘書広報課

1 背景・目的

宇佐市と慶州市の交流の契機は、慶州市の遺跡から出土されたものと同形である韓式小銅鐸や新羅系文様の瓦が宇佐市で出土されたことによる。これをきっかけに **1992 年 7 月**に友好親善都市の締結を行った。締結後は、市民交流をはじめ、イベントへの相互参加など、教育・文化・スポーツなどの幅広い分野にわたって交流を重ねている。

そして、友好親善都市締結 **30 周年**を迎えたことを契機に **2023 年 10 月**に姉妹都市締結を行った。併せて、市職員の相互派遣による行政交流事業の実施が決定し、**2024 年度**がはじめての職員交換となる。

本事業を通じて職員や市民同士の交流をさらに強化、継続し、両市の中核を担う人材を育成するとともに、国際化施策等への協力を通じた地域の国際化を目的としている。

2 研修の概要

行政研修

- ・文化体験、観光、交流事業への参画
- ・各種イベント準備及びイベント当日の業務援助、広報業務
- ・やさしい日本語研修、人権推進員研修、議会傍聴研修等
- ・各課の業務補助 ほか

3 研修実施にあたって工夫、苦労したこと

キムシヒョン研修員は行政一般の研修を希望されていたため、庁内各課に協力を仰ぎ、イベント準備等の補助や現地視察、学校訪問など幅広い分野で研修を行った。

また、キム研修員は日本留学の経験もあり、日本語が堪能だったため、語学面においてのサポートは必要なく、スムーズに研修を進めることができた。

《研修例①》

宇佐市の友好都市、姉妹都市との交流事業に参加し、他都市の視察や交流イベントでの



和文字焼祭りの様子

ブース運営、宇佐市の PR などを行った。一例として、8 月に宇佐市の姉妹都市である岡山県和気町を訪問。和文字焼祭りにて宇佐ブースを開設し、キム研修員には宇佐の PR 及び接客をしていただいた。和気町民の方々に姉妹都市宇佐市について知っていただくために、クイズを実施し、特産品の麦焼酎を試飲していただくなど、積極的な交流を行った。

《研修例②》

宇佐市において増加する外国人住民と日本人住民との多文化共生を図ることを目的に、多文化共生フォーラムを開催し、キム研修員に司会と発表をしていただいた。立命館アジア太平洋大学の教授らによるパネルディスカッション、在住外国人による発表、まちづくり協議会や日本語教室の取組発表などを実施し、300 人近い参加者が集まった。姉妹都市慶州市との交流や宇佐市にきた外国人の生の声などを市民に知っていただく貴重な機会となった。

《研修例③》

姉妹都市慶州市を知ってもらうことを目的に、市内小学校や児童クラブ、高齢者学級等を訪問し、慶州市の歴史や文化、世界遺産や観光地などの紹介の場を設けた。韓国の歴史や文化に興味があるが、慶州市については知らないという方がほとんどであったため、宇佐市と慶州市のつながりや交流について知っていただく機会となった。



多文化共生フォーラムの様子



学校訪問の様子

4 成果・課題

本市において、LGOTP を活用した職員相互派遣事業は初の試みであり、研修内容、研修員受入態勢の整備など全てが他団体を参考にしながらの実施となった。そんな中、キム研修員には、高い日本語能力と持ち前の明るさで、交流事業や多文化共生事業の推進に尽力していただいたほか、市職員をはじめ市民との交流も積極的に図っていただいた。キム研修員は、本市の観光事業や少子高齢化対策などについて幅広く学び、経験を積みたいという思いで研修に参加されていた。慶州市では 2025 年に APEC 首脳会議の開催が予定されているため、特に観光面において、研修で培った知識や経験を活かして活躍していただきたい。

慶州市と姉妹都市になって初めての職員相互派遣事業であったが、キム研修員との交流により、本市職員にとっても国際交流の意識を強くする意義のある事業となった。

今後も姉妹都市慶州市と幅広い分野での積極的な交流及び、両市の架け橋となる人材の育成を実施していきたい。

「宇佐市で過ごした6か月間の足跡」

氏 名 金 柿 儼
出 身 国 大韓民国
受入自治体 大分県宇佐市
研 修 先 宇佐市役所秘書広報課



1. 本事業に応募した動機

2015年、私は日本の栃木県で1年間留学生生活を通じて、忘れられない貴重な思い出を作りました。この経験は私の人生に大きな影響を与え、いつか日本との国際交流に関する仕事をしながら日韓国際交流に貢献したと思いました。しかし、その夢を叶えるのは簡単なことではなかったため、最終的に私は一般行政の公務員の道を選びました。

そんな中、偶然にもLGOTPというプログラムを知ることができました。このプログラムは、私の日本語能力を活かす貴重な機会であり、6か月という短い間ではありますが、これまで夢見ていた国際交流の仕事が体験できる絶好のチャンスだと思いました。特に、私が勤めている慶州市と姉妹都市の宇佐市が、行政、文化、教育など様々な分野で活発な交流をしていることがわかり、その中心に自分が立ち、国際交流をしてみたいという気持ちが湧いてきました。

この機会を通じて、私は一般行政の業務から一步離れ、国際交流担当の公務員として、両市をつなぐ架け橋になりたいと思い、応募を決めました。そのため、このプログラムに参加することを決めるのに迷いはありませんでした。募集要項を確認した直後、すぐに申請書類を作成して応募メールを送りました。

2. 研修の概要

私は慶州市役所で一般行政の公務員として勤務しておりましたので、今回の研修では一つの分野において専門的な知識やスキルを深めることはできませんでした。しかし、大学時代に日本で1年間の留学生生活を送った経験があり、この経験を活かして宇佐市の職員の皆様とのコミュニケーションを円滑に進めることができ、宇佐市役所に職員として文化交流、行政交流、翻訳などさまざまな分野で活躍することができました。特に力を入れた分野は文化交流であり、主に放課後教室を訪問し、宇佐市の子どもたちに韓国の文化や慶州市について紹介する発表を行いました。この活動を通じて、宇佐市の子どもたちに慶州市と宇佐市が30年以上にわたって友好関係を築いている都市であり、慶州市が1000年の歴史を持つ都市であることを伝える

ことができました。また、日本の子どもたちが慶州市についてどれくらい知っているか、韓国文化のどのような側面に興味を持っているかを把握することもできた良い機会にもなりました。これらの経験は、今後私が日韓関係の架け橋として活動する時に非常に役に立つと思います。

私は自分の日本語能力を活かし、宇佐市と慶州市の議会間および美術協会間の交流など様々な国際イベントで通訳や翻訳の仕事をしました。主な仕事は、両市の公文書や計画書を翻訳することと、両市の議会間交流で通訳として慶州市へ海外出張に行くなど、宇佐市の国際交流において非常に活躍しました。また、宇佐市多文化共生フォーラムでは、日本語で司会として参加し、最後のスケジュールである成果発表会でも宇佐市長や宇佐市役所の職員の皆さんの前で自分の日本語能力を発揮し、発表会は成功裏に終わりました。これにより、宇佐市派遣研修職員として遂行すべきことはすべて無事に完了できたと思います。

その他にも、宇佐市の職員の皆さんと一緒に市内のさまざまな場所を巡り、宇佐市の特産品や観光地を楽しみました。また、宇佐市で開催された数々の祭りに参加し、宇佐市の文化を存分に楽しみ、文化交流の重要性を改めて実感することができました。さらに、宇佐市の職員の皆さんと交流を通じて、少子化問題への対策、宇佐市の給食制度、日本の選挙制度など、多様な行政制度について学ぶという貴重な経験もできました。今回の6か月間の研修を通じて、私の日本語能力を活かし、宇佐市の方々と交流ができました。そのおかげで、多くの分野で活躍することもでき、さまざまな文化や制度を学び、体験することもできました。今後も日本と韓国の深い友情に貢献する有能な公務員として成長できるよう努力して行きます。

3. 帰国後の展望

6か月間の研修期間中、宇佐市役所の職員の皆様からの温かいご配慮のおかげで、無事に研修を終え、公務員として一段と成長することができました。特に、今回の研修を通じて、宇佐市と慶州市が姉妹都市となったきっかけや、宇佐市の観光地、特産品などについて詳しく知ることができました。この経験を基に、今後、両市間の文化交流や行政交流において、より貢献できる知識と能力を身につけることができました。

また、宇佐市役所で働きながら、職員の皆様との深い絆を築き、研修が終了した現在でも、物理的な距離を超えて、いつでも業務上の協力関係を維持できる貴重な関係を築けたことは、何よりも大きな成果であると思います。

これらの貴重な経験を基に、帰国後は慶州市の行政、観光、教育など様々な分野で活動し、2025年の慶州市で行われるAPEC首脳会議の準備においては、日本との協力関係を円滑に進める国際的な人材に一步近づいたと思います。LGOTPプログラムを経験した慶州市唯一の公務員として、来年のAPEC首脳会議を成功裏に開催できるよ

う、責任を持って取り組みたいと思います。

最後に、この研修を通じて出会ったすべての皆様に心より感謝申し上げます。今後も宇佐市と慶州市の友情がさらに深まり、発展していくことを心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



多文化共生フォーラムで司会



宇佐市小学校で慶州市紹介